

マーガレット・スパッフオードの「識字における
各自の最初の足跡——低い社会階層出身の17世紀
宗教的自叙伝作者が持つ読み書きの様々な経験——」
——『社会史』第4巻3号(1979年10月)論文の試訳——

坂本弘視

**Margaret Spufford's First steps in literacy —— a Japanese version of
her article contained in *Social History* 4-3 (1979, 10) ;
First steps in literacy: the reading and writing experiences
of the humblest seventeenth-century spiritual autobiographers ——**

Hiromi SAKAMOTO

17世紀の宗教的自叙伝には、地方のヨーマンの家柄や、それ以下の出身の男性達が、子供時代や教育、識字の重要性、そして宗教的確信が各自に対して持った重要性について書き記した最初の主体的な諸報告が含まれている。従って自叙伝は、断片的記事が多いけれども、比較的身分の低い人々が利用できた教育の総計やその効果について、直接の報告を含み、他の資料では得られない識字の効果への洞察を提供する。

こういった報告は非常に少なく、また残された物も、この種の物が受ける不利な立場によって欠点も持つ。宗教的自叙伝作者はピューリタンや非国教徒であり、¹ピューリタンや非国教徒が持つ様な社会的な観点でのある種の傾向を持った。そうではあるが、彼等はピューリタン達や非国教徒一般に還元すべきではなく非典型的な人物群として考察されるべきである。その

¹ I should like to thank Dr Roger Schofield for reading and commenting on this piece. I am also very grateful to Miss Sandy Harrison for collecting details from those autobiographies I could not myself see. The autobiographies have been extensively discussed in Owen C. Watkins, *The Puritan Experience* (1972) and Paul Delaney, *British Autobiography in the Seventeenth Century* (1969). Neither man is particularly interested in literacy, or the social origins of the humble autobiographer; indeed, the latter work includes the quite mistaken statement: 'Before 1700, no autobiographies by agricultural labourers or yeomen are known' (142, n. 25). Thirty-one of the 141 autobiographers whose works I have been able to examine describe the social status of the autobiographer's parents, and give some fragmentary details of the autobiographer's education. (Watkins, op. cit., 241-59, lists autobiographies, and I have used this list as my base.) In addition, five more of the autobiographers give some information on their education alone, and another dozen on their background alone. I have used this information to help build up a picture of the age at which reading and writing were taught. I have also used the diaries of men born in the seventeenth century of non-gentle rural origin, and, for good measure, the educational experience of the early eighteenth-century day-labourer poet, Stephen Duck.

理由は、自伝を書こうという衝動それ自身が一種の非典型性を規定するからである。² 自叙伝作者の全グループの内であっても、位置や出自、教育等の各枠組の中で、わざわざ宗教的経験を記述する為に場所を設定する人々は又例外であった。大抵の自叙伝作者は、彼等の年齢やイングランドのどの地域とか、どういった社会層の出身かについて何等述べる事も無く、単純に自叙伝を書く目的である、彼等の内面における神の働きを報告し始める。出身や教育について幾らか細かな記述をする人は、気性からそうする事に魅力を感じたのか、社会的構成に関係なく自叙伝作者の全グループを等しく代表するのかわかる術はない。

しかしながら、注目すべきこれ等の事柄にもかかわらず、自叙伝作者の内では自分の社会的背景をわざわざ記述する人物群は、まさに地方社会で最も教養の有る集団³から出ており、多くの教育機会を持ち、クウェイカー主義にどの領域よりも多くの改宗者を供給した⁴という事実は興味深い。彼等は若干の卸売り業者を含むが、主としてヨーマンの息子達であった。自叙伝作者は、勿論この社会背景から排他的に出たわけではない。富裕では無い境遇で生まれたか、教育が完了しない内に父親を亡くした為に不意に社会的等級を降下した人々は、周囲の環境を描写する中で、ヨーマンの水準以下で教養がごく僅かな人々についても、僅かな記録を残すことが出来た。その様な少数の人に、私はこれまで研究の焦点を当てて来た。したがって、ここで最も十分に議論される人々は、自叙伝作者の内ではもっとも典型から遠い人々という事になる。

自叙伝作者が提出する典型性という問題を問わないとして、ここで類似した社会的背景出身で、他の非ピューリタンの少年にも開かれていた17世紀イングランドにおける機会や経験の範囲という問題について、ここで取上げる自叙伝を読む事で、幾らかの洞察力をつけられると推測しても言い過ぎにはならないだろう。この報告は従って、彼等の経験に基づく。自叙伝作者のこのグループの何人かは、非常に短い期間の学校への出席が可能であっただけで、彼等が6, 7や8歳迄に到達した読みや書きの熟達段階についての彼等の報告は、17世紀において読み書きを学ぶ為に要する時間や、異なる技能を獲得する為に慣習となっている年齢に対して、非常に有用な指針を提供する。これ等自叙伝作者は、それぞれ異なる社会的世界や付き合いの範囲について、付随的に記述するが、その事は17世紀社会の様々な水準で、文字に関わる技能が普及しているという印象を与える。

子どもが労働能力を持った段階で労働力から切り離し、教育の為に時間と金銭を割く為に、一定の富裕さが必要であったという単純な理由に基づき、自己の名前を書き記す能力⁵はテュー

² It is possible that the Quaker autobiographers were less exceptional, for the Quakers seem to have had an entirely deliberate policy of using print for evangelism and polemic. Quaker autobiographies are therefore much the most common. For the whole subject of humble autobiographers, see David Vincent's forthcoming study of the autobiographies of working men in the first half of the nineteenth century, *Bread, Knowledge, and Freedom* (Europe, 1980). I am very much indebted to Dr Vincent for drawing my attention to the relevance of the seventeenth-century autobiographer to my work. His second chapter discusses both the seventeenth-century autobiographers and the eighteenth-century working-class autobiographers, and was my point of departure.

³ See below, p. 409.

⁴ R. T. Vann, *The Social Development of English Quakerism, 1655–1755* (1969), ch. 2.

⁵ The whole question of the use of signatures to provide a measure of the diffusion of literary skills over time, and of the crucial relationship of writing ability to reading ability, is discussed in R. S. Schofield, 'The measurement of literacy in pre-industrial England', in J. R. Goody (ed.), *Literacy in Traditional Societies* (1968), 318–25 and 'Some discussion of illiteracy in England, 1600–1800' (unpublished). A part of the latter has appeared as 'Dimensions of illiteracy, 1700–1850', *Explorations in Economic History*, x, 4 (1973), 437–54. I am very grateful for Dr Schofield's permission to use the unpublished, definitive discussion of the relationship between signing and reading ability.

ダー期とステュアート期のイーストアングリアにおける自己の社会的地位⁶と結合しているという事実が最終的に明らかにされた。この様に識字は経済的に決められていた。1580年から1700年の間では、商工業者の56パーセント、ヨーマンの65パーセントに対して、婦人は11パーセント、労働者は15パーセント、農夫は21パーセントしか自分の名前を書き記せなかった。グラマースクールでも、いやそれ以上に大学教育は、重苦しく社会的に制約を受けていたので、耕作者の中からはヨーマンの息子だけが、グラマースクールや大学の登録簿に顔を出す大きな成算を持っていた。⁷ このいささか憂鬱にさせる情景は、最低の教養しかない社会的グループにおいてさえ、自分の名前は書く事の出来る、小さくとも重要な幾つかの署名者からなるグループの存在に注目し損なってしまう。途切れ途切れで、散在的ではあるが、テューダー期やステュアート期のイングランドで利用可能な、真に現実的な初歩的教育を除いてしまうのは、グラマースクールや大学教育についてクドクド書いている所為である。⁸ 同時に、クレッシイは「識字力の獲得が、排他的に制度化された初歩の学校教育の成果であるのか、それとも個人の人生のある段階で、自分の名前の文字を書く事を学んだり、学び損なったのかについては知り得ない」と認めている。宗教的自叙伝作者の色々な経験が、正しくこの様な諸問題に対して随分沢山の光を投げかけてくれる。

読み書きの技能の獲得は、社会的に成層化されているので、最も貧しい人々から始めて順番を上げながら、この報告を整理した。この角度から見ると、大学教育を通して父親の支援を受けられるヨーマンの息子は非常に恵まれているので、大学のカレッジ登録簿を用いて研究している歴史家の認知外の社会部分での経験を書き留めている自叙伝作家を優先させて、事実上彼等を見捨てる。この事は勿論具体的な印象を重視しての事である。署名という事実から得られる、識字に関する量的な骸骨の上に少なくとも何らかの肉付けをするのは、質に関わる事実である。それが、グラマースクールの教育は実際問題として無意味であるが、それでも読み書きの技能は求められている様な暗くて陰気な輪郭のはっきりしない世界を照り輝かせる。

有用ではあるが、読む能力の普及とか、その能力を獲得するのに必要な学校教育の期間について、或る印象を得ようと特に企てられる基礎的な識字についての議論は、どうしても一つの項目の下に非常に異なる程度の技能を含む事になる。ショフィールドが問題にした能力に関する一つの問いかけは、簡単なピラカ、地方新聞、それともジョン・ロックの著作を読む事か

⁶ David Cressy, 'Educational opportunity in Tudor and Stuart England', *History of Education Quarterly* (Fall 1976), 314, and 'Literacy in seventeenth-century England: more evidence', *Journal of Interdisciplinary History*, viii, 1 (Summer 1977), 146-8. Also *Historical Journal*, xx (1977), 4-8.

⁷ Cressy, 'Educational opportunity', 309-13.

⁸ Ironically, in view of his recent care to stress restricted access to education in 'Educational opportunity', the best survey of elementary educational facilities and their effects is in David Cressy, 'Education and literacy in London and East Anglia 1580-1700' (Cambridge Ph. D. thesis, 1972) which lists all schoolmasters appearing in the Dioceses of London and Norwich and show them relatively well provided with masters in rural areas in the 1590s and early seventeenth century. Alan Smith 'A study of educational development in the dioceses of Lichfield and Coventry in the seventeenth century' (Leicester Ph. D. thesis, 1972) and 'Private schools and schoolmasters in the Dioceses of Lichfield and Coventry', *History of Education*, v, 2 (1976) shows that in these dioceses there were more unendowed schoolmasters teaching in more places between 1660 and 1700 than in 1600-40. This might, of course, indicate merely an improvement in the records. On the other hand, it may indicate that the periods when most elementary education was available differed in different parts of the country. In this case, Cressy's periodization of improvement and stagnation in literacy rates dose not necessarily apply to the whole country.

ある。⁹ ここで、私は「読む事の出来る能力」という項目の下で、次の人々を論じている自分に嫌でも気付く事となる。それは、辞書の助けを借りて『楽園喪失』を読む事の出来たウィルトシャーの一労働者や、熱心な少年に読む事を教える為に各単語の発声が出来たグロスタシャーの羊飼いや、その生徒は恐らく暗記だけで「読む事」を学んだであろう、「名声を博す学校教師」と自分で名乗ったヨークシャーの盲目の脱穀者である。全く異なる水準の流暢さや技能が含まれるのは明白であるが、それを区別する方法はない。この問題は指摘する事しか出来ない。私は慎重に、可能な所では自叙伝作者自身に語らせる様にしている。要点は、非常に制限された教育機会が、勿論高度に例外的であったろうけれども、少なくとも少数の人々が文章に関する技能を含む関心を伸ばす事を妨げなかったので、学校を6、7や9歳で去った人が、後に自分自身を紙上で表現したその方法は、それ自身で意味深いものである。

最も貧しい人々より上の自叙伝作者の経験を通して分析する前に、読み書きの技能を獲得するのに要した時間という特定の情報を、彼等の内で何人かは提供してくれるが、それを考慮する事は有用である。この事は、貧しい子ども達が受けた制約の多い教育経験が果たしたであろう、と考えられる諸効果の評価を容易にするだろう一つの背景を提供する。17世紀の教育家達は、田舎の学校の子ども達が標準的に7、8歳で教育を受け始める事をほのめかした。6歳は早かった。更に進んだ教育を受けた場合には、7歳で教育の制度面で書く事が始まる前に、様々な人に――大半は婦人であったが――読みを学んだ自叙伝作者の経験と良く合う。¹⁰

聡明な子どもは17世紀で2、3ヵ月有れば読む事を学ぶ事が出来たが、その場合でも一般化は難しいが非常に多くの部分を、知性、得られる教師の種類、子どもグループの大きさ等に依存しただろう。1636年にバークシャー、ビードンに生まれたオリバー・サンソムは次の様に書いた。「私が凡そ6歳の時、一人の婦人が開いている学校へ、読む事を学ぶ為に送られたが、その人は学ぶのに大変適切であると理解して、非常に上手に進めてくれたので、凡そ4ヵ月も経つと聖書の中の一章を非常に容易に読めた。」ラテン語と、書く事は7歳で始まった。¹¹ 日記作家のジョン・エヴリンは彼の学校教育を更に早く、4歳で始めたが、この時に地方教会の屋根付きの玄関部屋で、「初歩」を習い始める村の仲間達に加わった。しかし、彼は8歳になる迄、「私はラテン語初歩を学んだり、書く事には」取掛からなかった。¹² ジェイムズ・フレットウェルは、1699年生まれでヨークシャーの材木商人の長男であったが、勉強をずっと早めに始めた。

私が学ぶ事が出来るようになると直ぐに、(私の母は)すぐ隣に住んでいた勉強を教える老いたおかみさんの下に行かせた。だが、ここは2、3日しか続かなかったと思うが、理由は私が本に次第に飽きてしまった事と、私の母が望んだ様には、そのおかみさんが私を叱らなかった為で、私が聖書を読む事が出来るまで、母は自分の指導の下に置き、それ以後は、総ての弟、妹に対して同じ様にした。私に才能がつくに従って、母は私の読んだ箇所を良く見るように仕向けたので、直に、幾つかの旧約聖書にある歴史的な文章に注意を払う様になった。

⁹ Schofield, 'The measurement of literacy in pre-Industrial England', 313-14, and 'Some discussion of Illiteracy in England, 1600-1800'.

¹⁰ See Cressy, *Education in Tudor and Stuart England*, 70-2.

¹¹ Oiver Sansom, *An Account of the Many Remarkable Passages of the Life of Oliver Sansom...* (1710).

¹² John Evelyn, *Diary* for 1624 and 1628.

彼はカーク・サンドールの小さなグラマースクールに入学した。

私の愛する母は、自分が与える事の出来るよりも、もう少し多くの学習を私にさせたいと望んでいたのも、その先生が、私位の小さい子どもの間に座らせ、私に自分で何を言う事が出来るか聞きたいと立たせたが、先生の期待よりも良かったので、高レベルに移し、母に語形論を授けているかを尋ねられたが、母は済ませていたと思う。だから、先生が私に一番相応しいと最初に考えたホーンブック学級から、私が移るのを母は目撃する喜びを味わった。

先生の思い込みは驚きに値しなかった。ジェイムズは当時4歳と7ヵ月であった。¹³ 彼は明らかに早熟であった。他の早熟な子どもの成績も、普通の事では無かったから記録されていた。オリヴァー・ヘイワードは1640年代の標準年齢以前に流暢に読んだり書いたりする事を学んでいた、或るピューリタン牧師の娘と結婚した。「彼女は4歳でしかない時に、聖書の最も難しい章を読む事が出来」、地方の学校教師から書く事を教えてもらい、「学習面では並々ならぬ才能で、その為に6歳で、その礼拝堂での説教から数章句を書き留める事が出来る程であった。」¹⁴ 1692年に生まれた漁師で魚屋の娘であるファルマーシュのアン・グィンは、同様に「非常に幼い時に学習を始め、直ぐ3歳半の頃に上手に読めるようになり5歳前はかなり良く書く迄になった。」¹⁵ この少女達の伝記作家は、彼等の異常な早熟さを認識していたので、通常の子どもの読む事を学ぶのに要する時間という例としては、オリヴァー・サンソムを使う方が安全と思われる。

もし彼等の学校生活が早くに断たれてしまうという事が無かったなら、遅くとも7歳までには流暢に読んでいただろう。もしそれが、その歳までに聖書を「読むのを喜んでい」て、夜には寝床に持ち込んだ若い時のトマス・ボストンの様に、「バラムの驢馬という話の場合と同じく、好奇心だけがその気にさせた」¹⁶としても。

オリヴァー・サンソムの様に7歳で、ジョン・エヴリンの様に8歳で、早熟の小さなジェイムズ・フレットウェルの様に4歳で、少年が教育のこの段階を始めたにしても、グラマースクールでの教育を予想するなら、書く事はラテン語で始まった。第一のそれよりも第二の技能を修得する為に要する時間についての証拠を探す事は更に遥かに難しい。それでも非常に正確な一編の証拠が残されている。ケンブリッジ市参事会員サムエル・ニュートンは、1664年から1717年迄の日記をつけていた。¹⁷ それには市議会の宴会や有名人の葬儀の記述に混じって、非常に僅かではあるが個人情報が含まれている。しかしながら、1667年2月12日に参事会員ニュートンは書き記した。「火曜という日は、私の息子ジョン・ニュートンがケンブリッジのグラマースクールに初めて行った時であった。」同年10月の、議会開会と家族洗礼の記事の間に、子どもの手による記入が現われる。

¹³ James Fretwell, 'Yorkshire diaries', *Surtees Society* (1877), 183-4.

¹⁴ The Rev. Oliver Heyward, B. A., 1630-1702 (ed. J. Horsfall-Turner), *His Autobiography, Diaries, Anecdotes and Event Books* (1882), I, 58.

¹⁵ Thomas Gwin, *A Memorial of Anne Gwin* (1715) and the *Journal of Thomas Gwin of Falmouth* (1837).

¹⁶ Thomas Boston (ed. George D. Low), *A General Account of my Life by Thomas Boston, A.M. Minister at Simprin, 1699-1707 and at Ettrick, 1707-1732*, Edinburgh, 1908), 3.

¹⁷ J. F. Foster (ed.), 'The diary of Samuel Newton, Alderman of Cambridge (1662-1717)', *Cambridge Antiquarian Society*, Octavo Publications xxiii, 17 and 23. The original is in Downing College Library, and the entry by John Newton appears on fo. 74 of the MS.

私ジョン・ニュートンは、主の生誕から1667年のこの10月19日、コートを着るが、その時未だ満8歳になっていなかったと、私ジョン・ニュートンがこれを書いた。

この記入には父親らしい批評はないが、市参事会員ニュートンは記入する事を認め新たな達成での息子の満足感を共有したに違いない。明らかに、7歳のジョンにとって習得するのに6ヵ月を要した書くという新鮮な特殊技能は、新調した半ズボンを着けた男性世界への登場と同じ程度の誇らしい出来事であった。

大雑把な指針として、7歳になる迄に学校へ行く機会を持った子ども達は、読む能力に見込みがあるとして良さそうである。同様に、8歳になるまで学校に行き続けた子ども達は書く能力に見込みがある。

もし例外的に恵まれたであろう自叙伝作者に4から6ヵ月読む事を学ばせたなら、でも彼等はその技能を4から6の様々な年齢で習得し始めているので、知性の劣る子どもや早熟の子どもにとって安全の余地を残す為には、この学習期間を二倍にするのが合理的であろう。¹⁸そこで作業仮説は、学校へ行く機会の有った子ども達は7歳迄に読む事を学んでいたであろう、となるであろう。同様に、自叙伝作者達は標準的にカリキュラムの中で書く事の分野は7歳で始めていたし、ジョン・ニュートンが上手に書く為には6ヵ月を要しているので、この期間も二倍にするのが合理的であり、書く為の能力は標準的には8歳迄に獲得された事を示唆している。

仮にこれ等の仮説が認められるなら、ヨーマンの65パーセントに対して、労働者では15パーセント、農民の21パーセントだけが署名し得る事を示す¹⁹、クレッシイによって集められた署名能力での職業上の差異に関する事実から導かれるのは、これ等のパーセントが7歳から8歳までに学校教育の機会を持ったそれぞれの社会的グループの割合を概略的に表わすという事である。勿論地方に或る種の教授活動の存在を伴ってではあるが、両親の経済的地位が学校教育の決定要因である²⁰事実をこれ以上明白に示す事は不可能であろう。労働者や、より少ない程度で、農民の子ども達²¹は、家族の経済にとって意味がある貢献をするのに十分に力強くなるが早いか、家族の労働力に加わる事を必要とされた。²²

彼等が6歳前に真の寄与を為し得たと考える事は難しい。父親が緊急に息子の稼ぎを必要と

¹⁸ This coincides well with the expectations of the early nineteenth-century monitorial schools, in which a child was expected to learn to read in eleven months. Schofield, 'Measurement of literacy in pre-Industrial England', 316.

¹⁹ See above, p. 409.

²⁰ Pace Peter Clark, who suggests that my argument that 'the husbandman who depended entirely on familial labour was probably...unable to afford the loss of labour which his child's school attendance entailed...is stronger in the context of higher education than in the case of primary instruction. It does not take into account those many *longeurs* in the agricultural year...when parents were probably quite happy to send a noisy son out to school for a month or so.' Peter Clark, *English Provincial Society from the Reformation to the Revolution: Religion, Politics and Society in Kent, 1500-1640* (1977), 191. The acquisition of the ability to sign was certainly normally acquired young, probably between seven and eight, and Cressy's evidence shows quite conclusively that economic status determined education to this level.

²¹ See below, Thomas Carleton, pp. 417-18, for the sporadic opportunities of a husbandman's son had for learning, and John Bunyan, p. 418, who knew perfectly well that his ability to write was unusual in the economic circumstances of his home, and had to be accounted for.

²² Christopher Wase in his *New Discovery of the Old Art of Teaching School* (1660) wrote 'many parents will not spare their children to learn if they can but find them any employment about their domestic or rural affairs whereby they may save a penny', although he also implied that such families spared their children to learn to read and write. Quoted by Cressy, *Education in Tudor and Stuart England*, 45.

しても、それでも子どもを5歳から6歳近く迄学校へ行かせていた、²³ トマス・トライアンの事例がこの事を裏付ける。トマス・デロニの文芸的な証拠も同様で、彼自身織工であるが、過去の黄金時代について1599年の衣類の取引を賞賛する突飛な小説の一つで書いた。

神が沢山の子ども達を恵み祝福した貧乏な人々に、子どもを占有した事から、彼等に6歳か7歳になるまでに自分自身のパンを得る事が出来なければならないと厳命した。²⁴

6歳か7歳という開始年齢についての更なる証拠は、子ども達の就労可能年齢を管理する16、17世紀のワークハウス規定類からも得られる。地方自治体のワークハウスが、そうする事が可能なのに児童労働から利益を得ようとししない事は有りそうに無いから、この規定類は特に信頼できそうに思われる。ウェストミンスターワークハウスは1560年に6歳以上で12歳未満の子どもを「織工達の為に、糸巻きを回す為に」²⁵ 送出している。

オルダースゲイトワークハウスは、1677年に3歳から10歳の子ども達を受入れ、その設立者は「幼い子どもにとっては、亜麻糸を紡ぐ以上に容易に学べる物は無い。それは彼等の指が小さすぎる事はないけれども、亜麻の繊維を引き綺麗な糸を作るには十分に大きいからである。」と書いた。当時、彼が書いた1678年と1681年に、彼の元には「一日に2ペンス稼ぐ事が出来る、7、8歳越えない数人の子ども」がいた。²⁶ 1699年に、7歳以上の総ての貧しい教区の子ども達の為に、ビショップゲイトワークハウスが設立された。彼等は、食事と休養の一時間と、読み書きを覚えてもらう2時間は有るが、朝の7時から夜の6時まで雇われる事になっていた。²⁷ ところで、当時の標準からは人道的であったこのワークハウスは、そこの子ども達がこれだけの時間すっかり働いたり勉強したり出来るという仮定の下に、明らかに運営された。それ故、7歳未満の子ども達を受入れなかったという事が非常に重要である。意味を持ち始めた事は、まるで7歳が、丸一日の労働日を上手く処理でき、賃金を稼ぎ始める年齢であると大いに考えられたらしい事である。²⁸ 7歳は又、テウダー期の両親が自分の息子を定期的に射撃場で訓練をさせる法規上の義務を持つ、つまり、軍事に関する成人の世界で重要と考えられ始めるに十分な体力がある年齢でもあった。明らかに、地方の子ども達は、これ等都市の孤児によって行われた下請け仕事を供給する繊維産業がある様な地域でのみ、定期的に雇用され得たのである。多くの地域では、彼等の働く機会は、更に季節によって左右されたりし、ヘンリー・ベストが叙述した線にもっと沿っていただろう。彼の「牛馬糞やモグラ塚を撒き広げる仲間」

²³ See below, p. 415.

²⁴ Thomas Deloney, *The Pleasant History of Thomas of Reading, or, the Six Worthy Yeomen of the West* (1599?) ch. I. One of the claims to fame of another of Deloney's heroes, Jack of Newbery, was that he set ninety-six poor children on work wool-picking; *The Pleasant History of John Winchcomb, in his younger year called Jack of Newbery* (1597). ch. III; *The Works of Thomas Deloney* (ed. F.O. Mann) (1912), 213-37.

²⁵ Alice Clark, *Working Life of Women in the Seventeenth Century* (1919), 131. In the 1640s unskilled agricultural labourers were earning 12d. a day (Joan Thirsk (ed.), *Agrarian History of England and Wales, iv, 1560-1640*, 864). This rate was the same as that for building labourers, which remained constant at 12d. a day until just after 1690. (E.H. Phelps Brown and Sheila V. Hopkins, 'Seven centuries of building wages', in E.M. Carus-Wilson (ed.), *Essays in Economic History*, II (1962), 172-3 and 177.) These children were earning a sixth of a man's wage. Exceptionally skilled children, like Thomas Tryon, could earn a third of a man's wage at eight.

²⁶ I. Pinchbeck and M. Hewitt, *Children in English Society* (1969), I, 161.

²⁷ *Ibid.*, 154-6.

²⁸ *Ibid.*, 10.

は、大抵の場合婦人や少年少女で「大きくて有能な人達」には一日3ペンス、「小さな人達」には一日2ペンスが支払われた。²⁹ 明らかに、トマス・トライアンやウェストミンスターワークハウスの子どもの例が示すように、非常な必要があれば、7歳にならない内に働き始めた。³⁰

確かに7歳になると、子どもはかなりの賃金を稼ぐ事ができ、労働力同様に、軍事的にも萌芽的成員と見なされたとしても、同時にその年では読む事は充分に出来ても、書く事には未だ従事していないと思われていた様である。この結論が正しいとすれば、これは重要な事である。その性質から測定出来そうにもないが、様々の読む技能は16, 17世紀のイングランドで様々の書く技能よりも、子ども達が読む事を学んだ年齢が、比較的貧しい子ども達が多く賃金労働を未だ出来ない為に、ある程度の学校教育を受ける事が出来たという単純な理由によって、大変広く社会的に普及していたと見なし得るという事を示す。書く能力が、労働者や農民の息子達には小さな割合に制限され、ヨーマンの息子達の間には非常に広く普及している事実が同時に説明出来る。様々の読む技能が同じ理由で非常に広い範囲に普及出来たであろう。文化的変動に道を開いたのは、勿論の事ではあるが、書く能力ではなく読む能力であった。

この議論は、勿論、他の方法で始める事も出来る。労働者の息子の15パーセントが自分の名前を署名することが出来、恐らく読む事も出来るであろうという事を我々は知っている。これから、ヨーマンの息子にはもっと高い割合でそうする事が出来たであろうという事が判る。従って、経済的必要が学ぶ機会を制限した要因らしいという事を知る。少年は、6歳から8歳のある段階で、肉体的にも体力が有り、かなりの程度で家計に寄与できる迄になったと見える。重要な問題は、この箇所が6歳に近かったか7歳に近かったかどうかである。この答に、学校教育をその地方で受ける可能性と共に、様々な職業的背景を持つ読む事が出来た少年の数が依存した。

少なくとも一人の自叙伝作者は農業労働者に成っているけれども、身元の確認できない自叙伝作者が、一人の農業労働者によって父親に成った。出身の確認できる自叙伝作者の中で、トマス・トライアンは、極貧の家の出で、自分で教育を得る為には、確かに非常に長期の戦いをした。彼は1634年に、オックスフォードシャーのビベリーで生まれ、村の瓦と漆喰職人で、「非常に評判の良い正直で真面目であったが、大勢の子どもがいて子ども達総てを遅くならない内に働かせざるを得なかった男」³¹の息子であった。瓦職人や漆喰職人は建設職人で、農業労働者よりもずっと豊かな種類に属していたが、17世紀の初頭においては、彼等の賃金の購買力は非常に低かった。³²

²⁹ Henry Best, *Rural Economy in Yorkshire in 1641; being the farming and account books of Henry Best, of Elswell, in the East Riding of the county of York* (ed. C. B. Robinson) (Surtees Soc., no. 33, 1857)

³⁰ Defoe, writing in the 1720s, is unusual by seventeenth-century standards in implying that children commonly started work before six. He says Yorkshire children could earn their living at four, round Taunton at five, and in east and mid-Norfolk 'the very children after four or five years of Age could earn their own Bread'. Quoted by Pinchbeck and Hewitt, *op. cit.*, 310-11. Either he exaggerated, or there had been a social change, and work started earlier, perhaps because the numbers of agricultural labourers were swelling so much as the pace of engrossing increased.

³¹ *Some Memoirs of the Life of Mr Tho: Tryon, late of London, merchant: written by himself...* (1705), 7-9.

³² J. Thirsk (ed.), *Agrarian History of England and Wales, IV, 1500-1640*, 865. In 1586 in London their day-wages without food had been fixed at 13d. a day, along with masons, coopers and glaziers under the Statute of Artificers. This compared with 9d. a day for 'common labourers'. R. H. Tawney and Eileen Power (eds.), *Tudor Econ. Documents*, I (1924), 369-70.

家族の規模は、理解し易い理由で、教育機会を規定する事は多かった。³³ 再三自叙伝作者の内、一人の子どもだけとか、小規模の家族の子ども達が有利な立場を示す。多くの兄弟姉妹がいたにもかかわらず、年下のトマスが短期間ではあったが学校へ行かせてもらった。「5歳の頃、学校へ入れられたが、小さな学校友達の例に倣って、遊びに夢中になった為に、自分の暮しの為に仕事に遣らされた時には殆ど文字の区別も学んでいなかった」と。彼の言う事ははっきりしないけれども、これは彼が6歳になる前の事だったらしい。6歳では、幼いトマス・トリアンは、彼が言う様に明らかに遊びが大切と考えていた事からして強く動機づけされなかったか、上手に教えてもらえなかった。しかしながら、オリヴァー・サンソムが学習を始めたその年頃に学校を止めて働きに出たという事を憶えておく事は価値がある。彼が読む事を学び損なった事は、その損害を償うために重大な決意をする事になる。

彼の家計への貢献は直に始まり、貢献できる自分の力に明らかに物凄い誇りを持ち、「父が私に与えた最初の仕事は、糸紡ぎと羊毛等を梳く事で、その事に非常に勤勉だったので、8歳で一日に4ポンド紡ぐ程に熟達して、1週間で2シリングになった」³⁴と述べている。彼は12か13歳まで引き続き紡ぎの仕事をするが、10歳迄に「紡ぎ車に飽き始め」、日曜日にはその地方の羊飼いとその群れを追う手伝いを始め、彼の計算では1ペニーか2ペンスを稼いだ。彼の父親が、自分の職業として父親の徒弟となる事を望んだ時には、大変不本意ながら従った。と言うのも、その時までには彼は羊飼いに成ると心に決めていたからである。「私の父は、この点で私の希望を満たそうとはしなかったが、繰返しうるさくせがんで、終に私が勝って、父は僅かの数の羊を買ってくれた。細心の注意を払うだけでなく大きな満足と喜びを持って、その飼育と管理に向かった。」しかし、今や終に、彼の最も恵まれた同世代の人々が大学に進むその年で、³⁵ 読み書き能力を求める願いがトマスを捕らえた。これを満足させる為に都合をつけた方法についての叙述を全文引用する価値があろう。

この時迄、今や13歳になろうというのに、私は読む事ができなかった。そこで、読む事の広大な有用性を考えて、私は一冊の入門書を買って、先ず一つの力を手に入れ、綴りを私に教えてくれる次の段階に進んだ。そういう順で不完全ながら読む事を学んだ。私の先生達は、決して準備の出来た読み手ではなかったが、短い期間に必要な間に合う程度には十分に読む事を学び終え、私は書く事を学びたいと望んだが、一人の先生を探す為に、大

³³ The brutal reality was most simply stated later by John Clare in his autobiography. He was born the son of a Northamptonshire day-labourer in 1793: 'As my parents had the good fate to have but a small family, I being the eldest of 4, two of whom dyed in their Infancy, my mother's hopeful ambition ran high of being able to make me a good scholar...but God help her, her hopeful and tender kindness was often cross'd with difficulty, for there was often enough to do to keep cart upon wheels, as the saying is, without incurring an extra expence of pulling me to school...I believe I was not older than 10 when my father took me to seek the rewards of industry... [but] As to my schooling, I think never a year pass'd me till I was 11 or 12, but 3 months or more at the worst of times was luckily spend for my improvement', Edmund Blunden (ed.), *Sketches in the Life of John Clare* (1931).

³⁴ Tryon, op. cit., 10-11. This is approximately double the earnings of eight-year-olds quoted as an example of industrious good management. See above, p.413.

³⁵ The autobiographers whose parents were prosperous enough to enable them to go to university quite frequently went as early as fourteen. This conflicts with Cressy's findings that the mean age for entry to university was sixteen (thesis cit.) and bears out the suggestion that the autobiographers were probably an exceptionally gifted group.

いに途方に暮れてしまった。私の仲間である羊飼いの内に、誰一人それを教える事が出来なかったからである。最後に私は数人の貧乏な人の子ども達に読み書きを教えた足の不自由な若者を思い出し、その時までには2頭の羊を自分の物として得ていたので、私は自分で彼に申し出て、私に文字を書く事を教えてくれるならばその羊の内の一頭を提供しようと合意が出来、羊飼いの仲間に加えた。³⁶

読む事を学ぶ事と対照的に、トマスが書く事を学ぶ際に気付いた困難さは非常に重要に思える。彼の仲間である羊飼いは、グループとして準備の出来た読み手では無かったけれども、再びグループとして彼に単語を綴る事を学ぶ手助けをする才能を発揮した。彼は、仲間の誰にも助けてもらう為に依存しなかった。ところで、このグロスターシャーの羊飼いは読む事は出来ても、書く事は全く出来なかった。一人の何程かの資格のある教師が探し求められ、そんな人でも見付けるのに彼には努力が必要であった。

トマス・トライアンは結局ロンドンへ徒弟として行った。痕跡への彼の追加は続いた。自分の昼間の仕事が終わった後で、夜に2、3時間きちんと座って読む時間を作った。彼の賃金は教育に使われた。「それで本を備え、個人教師達に支払い、自分の都合に役立てた。」彼は特に医学に関心を持ち、「自然の全体的研究」と定義付け、その中に占星術を置くが、それを「自然の内での神が管理する方法、それについて普通に起る弊害ゆえに、宗教以上に責められるべきではなく、その理由は、迷信と一般に曲解されるか、偽善や不正行為を覆い隠すものとされているからである」と見なした。35歳で結婚した後でさえ、彼は度し難い自己改良家そのまま、今度は音楽の勉強をしていた。

35歳頃、私は音楽を学ぼうと企て、そこに生まれつきの傾向が有ったので、それ迄の様に、勉強時間の間も、自分の仕事とする職業を着実にしていたので、音楽には夜に機会を作るか、それとも一番良く出来る朝に、1時間か2時間しか宛てる事が出来なかったが、ベースピオーラでかなり良い進歩をすることが出来た。他の人がコーヒーハウスや居酒屋で費やす時間を、私は読んだり、書いたり、音楽やその他有用な活動に費やした。これ等の事によって、教育の欠陥に対して出来るだけ埋め合わせた。³⁷

彼自身の興味の範囲を映し出す彼の著作には、『郷土に住む者の必携 (*The Country Man's Companion*)』、『良い家婦は医者になる (*The Good Housewife made a Doctor*)』、『夢と洞察力 (*Dreams and Visions*)』、『職業の本 (*Book of Trade*)』、『西インド諸島の人々へ友人としての助言 (*Friendly Advice to the People of the West Indies*)』、『教育の新しい方法 (*A New Method of Education*)』を含むが、中でも驚くべきは『ピタゴラスへのアベロエスの手紙 (*Averroes Letter to Pythagoras*)』である。読む事の出来る前に6歳で学校を離れた少年にとって、これは注目すべき出版リストである。

トマス・トライアンが、彼が設立した宗教グループの為に彼の「原理」を書き出し始めた時、識字の為の闘いを含めて彼自身の諸経験が直接にその中に映し出された。彼の「婦人が守るに

³⁶ Tryon, op. cit., 13–15.

³⁷ *Ibid.*, 42–4.

相応しい規則と命令」の中で、全体として健全で寛容な、子どもを養育する為の様々な規定の中に次の様子に書いた。

1歳半か2歳で、彼等に、この文字は何、この単語は何と、普通の人が用いる方法で困らせる事無く尋ねながら、文字を示しなさい。あるいはその代りに彼等が見ている所に文字を置いて、彼等に聞かせながら何度も発音を繰り返しなさい。そうすれば、こうして僅かな時間で、24文字や、家庭の道具、色々な品物、家具を、家庭の人が名付けるの聞く事で、そうしながら、総ての物を区別する事を容易に見聴き慣れたものとして学ぶだろう。同時に、貴方の子ども達にペンを握る事を教えて、彼等の手の案内をしなさい。そうすれば、この方法で貴方の子ども達は、自分で説明できなくとも、3、4か、5歳で読み書き出来るように成るだろう。貴方の子ども達の隠れた才能に活気が無く、学ぶのに難しい時は、咎めたり、嘲笑にさらす事無く、一人にして学習の利点を示しなさい。そうすれば、その事が彼等の進歩にどれほど多く向かって行く事だろう。³⁸

フラッシュカード【単語・数字・絵などを瞬間的に見せるドリル用のカード】の主唱は、読む事と同時に書く事を教える事の示唆と同様に、不思議な事に、近代的な響きを持っている。読む事を教える事は、母親の自然な働きであるという仮定は、とりわけ自叙伝作者の何人もの人が自分の母親から、実際に読む事を教えられたという理由で興味がある。17世紀の社会では非常に少数の文学婦人が、不釣り合いな程大きな影響を与えたと言って良いだろう。³⁹

熟練労働者よりも寧ろ農夫を背後に持つ出自の少年の方が、初歩の教育（a rudimentary education）を獲るに充分長く、仕事に就かないで居る程度にはずっと幸せであっただろう。彼の教育が一段と緊急の農作業で何時も中断され勝ちであったとしてもそうである。トマス・カールトンはその少年の状況を非常に良く叙述した。

肉に従えば、私は（正直ではあるが）卑しい両親から生まれたが、私の父親はカンバーランド州の農夫で、私は、彼の意志に従って、或る時には学校に出て学び、或る時には家畜の群を集め、羊や牛の番をし、又或る時には鋤や荷車や脱穀機の仕事や、他の法律が認める仕事をした。⁴⁰

この散発的な学校教育の背景が有って、精神的な渇きが彼を捕らえた時に、「聖書を読み、探究する事に、身を任せる」事が可能に成った。この様に断続的な教育経験が、自分の名前を書くだけの学問を得るのに十分に幸運だった農夫⁴¹の5分の1にとっては、恐らく典型的であっ

³⁸ My italics; *ibid.*, 117–18, 122–3.

³⁹ See note at end.

⁴⁰ Thomas Carleton, *The Captives Complaint or the Prisoners Plea* (1688).

⁴¹ The term 'husbandman' can be misleadingly used in a literary sense. Otherwise, it normally describes the group of farmers with medium-sized farms between fifteen and fifty acres who were becoming increasingly rare in arable areas in the seventeenth century. The plotting of values of the goods of men described as husbandmen by their neighbours who drew up their inventories shows this quite clearly, although the range of values of husbandmen's goods is wide, and will overlap considerably with the bottom of the range of values of the more prosperous 'yeomen's' goods. Margaret Spufford, 'The significance of the Cambridgeshire Hearth Tax', *Cambridge Antiquarian Society*, LV (1962), 54, n. 3.

ただろう。

総ての17世紀国教反対者の内で最も良く知られているジョン・バニアンは、トマス・トライアンの家族より豊かでもっと少人数ではあったけれども、貧乏な家庭の出である。彼はトライアンがした様な基礎教育の為に闘う必要は無かった。彼の父親はベドフォードシャーに住居と9エーカーの土地を持っていた。⁴² これは辛うじて生存に適うものであった。彼は賃金労働よりも鋳掛け屋をして生計の不足分を補っていたので、自分の土地での農夫として、あるいは自分の商売での貧しい職人としてどちらにでも分類可能であった。両親はかなり貧しかったが、バニアンは「私の両親は卑しかったけれども、私を学校へ行かせ、読み書きの両方を学ばせる事を彼等の心に注いでくれた事を神に感謝した。」と書いた。彼の両親の社会的地位を超える事の出来る教育上の利益を得た事を彼は十分に気付いていた。

両親の事を記述した自叙伝作者の内⁴³、唯バックスターとバニアンだけが、安手の印刷物を読んだ事を子供時代の過ちとでも思っていた。ヨーマンの息子であるリチャード・バックスターは10歳頃に犯した彼の初期の過ちの内に、「私は、恋愛小説中の愛や、寓話や昔話に大変魅せられて、優しい想いを墮落させ、時間を無くした」⁴⁴ 事を、書き出した。彼は又、1630年代に仕事中の呼び売り商人の姿を一瞥した非常に珍しい経験を次の様に記している。「その頃、物語詩や何冊かの良い本を持った貧しい行商人が戸口に來た事を神に感謝したが、私の父親は彼からシップ博士の『傷ついたリード楽器 (Bruised Reed)』を買ってくれた。」

バニアンも呼び売り商人から、戸口や市場のいずれかで、読み物を得ていた様である。彼が育ったエルストウはベドフォードの州都から2マイルであるが、17世紀には書店を持つほど十分に大きな地方都市ではなかった。更に彼が記述する読み物は呼び売り商人の品物である。彼は少年時代の個人的な好みの点でバックスターより非常に変わっていた。彼は次の様に書いた。

バラッド、新聞、騎乗のジョージ、サウサンプトンのベヴィスが欲しい、珍しい学問を教え昔話を語ってくれる本が欲しい。でも聖書は要らないし、好きではない。聖書は昔私の所にあつて、今弟達の所にあるから。⁴⁵

⁴² Roger Sharrock, *John Bunyan* (1968; 1st edn 1954), 9, 11–12.

⁴³ Others, who did not describe their backgrounds, confessed to unscriptural reading. Vavasour Powell, from the Welsh border, also had 'no esteem for the holy scripture, nor cared not at all to look into them, but either Historical or Poetical Books, Romance and the like were all my delight'. V. Powell, *The Life and Death of Mr Vavasour Powell, that faithful minister and confessor of Jesus Christ...* (1671). Richard Kilby was so distressed by his besetting sin of lust that he recommended 'Whatsoever lewd ballet, book or picture cometh to your hands, teare it all to pieces or burne it to ashes'. R. Kilby, *The burthen of a loaded conscience: or the miserie of sinne etc.* (1608).

⁴⁴ N. H. Keeble (ed.), *Autobiography of Richard Baxter* (1974), 5, 7. I am very grateful to Cedric Parry for drawing this particular passage to my attention.

⁴⁵ John Bunyan, *Sighs from Hell* (2nd edn, 1666?), 147–8. The italics are his own. In 1631, Richard Brathwait in *Whimzies: or, a New Cast of Characters* had not been complimentary about the 'Corranto-Coiner' who was presumably the source of the news-books Bunyan enjoyed. 'His mint goes weekly, and he coins monie by it...', Brathwait wrote. 'The vulgar doe admire him, holding his novels oracular; and these are usually sent for tokens...betwixt city and countrey...You shall many times find in his corrants miserable distructions; here a city taken by force before it bee besieged; there a countrey laid waste before even the enemy entered...He is the very landskip of our age...Yet our best comfort is that his chymeras live not long; a weeke is the longest in the ditie, and after their arrival, a little longer in the countrey; which past, they melt like Butter, or match a pipe, and so Burne.' Quoted by Joseph Frank, *The Beginning of the English Newspaper 1620–60* (1961), 276.

この言外の意味は明らかで、バニアンの子供か同輩の仲間が一般的に、1660年代に著述する時にバニアン自身が回心後には避けた、バラッドや呼び売り本の読者であったという事である。⁴⁶

バニアンの子供体験は、彼の上にある影響を残した様に見える。⁴⁷ サウサンプトンのベヴィスは早い繋がりでも冒険が冒険を呼ぶ様な、典型的な息もつかない、半ば騎士道精神にのっとった物語であった。⁴⁸ 主人公の母親が彼の父親を騙して死に追い遣り、その殺人者と結婚する。息子は最初に逃げるが父親の城近くの丘で叔父の羊の番をする。その後「異教徒」に奴隷として売られてしまう。そこで彼等の神である「アポロ女神」を礼拝する事を拒み、巨大な野生の猪を殺して、2万人を従える将軍とされ、王女の愛を獲得する。それなのに、早くも最悪な事に、彼は裏切られ地下牢に2匹のドラゴンと一緒に投げ込まれる。それでも看守を殺す事が出来て、パンと水での7年後に王女と沢山のお金と宝石を持って逃亡する。次に洞窟で2匹のライオンに襲われ「長さ30フィート、眉毛の間が1フィートの醜い巨人」と出会い、それを打ち負かして彼の騎士見習いとし、40フィートの長さのドラゴンを1匹殺す。その後で、異教徒の王女に洗礼を施し、沢山の更なる冒険をした後で、イングランドに攻め込み、自分の父親の復讐をし、連れの異教徒の淑女と結婚をし、マーシャル卿となる。ここには性格描写の試みは一切無く、暴力や流血沙汰から全編を成す書き物は青年前か青年の男性を読み手としている様であるが、バニアンの子言が信じられるとするなら、大いに成功したのではないか。彼自身の著作はこれからは非常に遠く離れているが、彼の想像の幾らかは、彼の少年の頃にした読書によっている様に見える。キリスト教徒が途中で出会うライオン、巨大なアポロ女神の記述、教皇や異教徒の巨人が住む洞窟、これ等総てが、巨大な絶望が彼自身である様に、この読書に何かを負っている。バニアンの子言にも及ぶ作品も、その中で牧師をしていたベドフォード周辺の村々で知り得た地方の読者向けであった事は確かである事も、記憶する価値がある。彼の読者が呼び売り本の巨人やライオンやドラゴンや闘いに、欽定訳聖書の韻律と同じ様に馴染んでいる事を彼は知っていた。

ウェールズ国境地帯出身のエリーズ・エヴァンズは1606年か1607年に生まれた。⁴⁹ 彼の父

⁴⁶ It is an interesting one, since his education was abnormally good for his economic and social background, and he had learnt to write as well as to read. It might imply that his 'brethren' who had not learnt both skills, did read the chap literature.

⁴⁷ When Mrs Leavis wrote of the literary inadequacy and emotional poverty of twentieth-century mass fiction in 1939, she was unaware of the existence of the voluminous chap-literature of the seventeenth and eighteenth centuries, the content of which would have provided her with an apt comparison with modern bestsellers. She wrote of Bunyan's prose, as if only the *Authorised Version* was available to form his style, and of the cultural contacts of working-class men up to the 1850s as if only the *Bible*, *the Pilgrim's Process*, *Paradise Lost* and *Robinson Crusoe*, with works by Addison, Swift and Goldsmith and so on, were marked. 'No energy was wasted, the edge of their taste was not blunted on bad writing and cheap thinking', Q. D. Leavis, *Fiction and the Reading Public* (1939), 97-102, 106-15.

⁴⁸ A copy survives in Samuel Pepys's collection of *Vulgaria*, III, item 10, Pepys Library, Magdalene College, Cambridge. 'George on Horseback' is probably the chapbook *St George*. There is a copy in Pepys's *Penny Merriments*, II, 105-28, of the edition printed in the 1680s. The title page bears a really impressive woodcut of a knight on horseback, and Bunyan, working from memory, might well have arrived at his title from this visual recollection, combined perhaps with a disinclination to give the hero his saintly title.

⁴⁹ A. Evans, *An echo to the voice from heaven. Or a narration of the life, and manner of the special calling, and visions of Arise Evans...* (1652).

親はバニアンやトライアの父親の何れよりも、かなり富裕であり、エリーズの息子が書いた次の記述によると富裕なヨーマンか、場合によっては小紳士である様に思われる。

私の父親はその教区では十分な暮らし向きであったので、牧師補を常時食卓でもてなしていたし、少しばかりの借地を与え暮らしを立てさせた。十分の一税の全額を受け取った教区牧師からは少額の手当てしか受けていなかったこの牧師に対する親切の所為でもあった。その牧師は彼に出来る好意を父親の家族に尽くすのに骨を折ってくれ、はっきりと話し始めて直に、彼が行っている学校に入れてもらった。

しかし、エリーズがたったの6歳の時に、彼の父親は亡くなってしまった。

自分自身について事実に基づく細かな事柄を少しでも記している驚くほど大勢の自叙伝作者は両親の片方か、両方の死を詳しく書いている。⁵⁰ 子ども達の八分の一程の多くが、彼等が7歳という年齢、この年では読む事は学んでも、書く事は学んでいないと私が示唆する年齢であるが、7歳に成る迄に父親を亡くしてしまった様に思われる。⁵¹ 若い家族を残しての父親の死亡は家庭経済が崩壊した事を意味した。その時勉学中だった息子は、自分の生活費を稼ぐ為か、母親を助ける為に、普通は学校を去った。彼はしばしば社会的階梯を次々と何時までも滑り落ちて行ったように見えるが、農場労働者の生活について何程かの記述が残されているのは、正にこの理由による。それは父親の死亡迄はグラマースクールに行けたが、母親の再婚後に農業の家内奉公人となった少年によって書かれた。母親の死亡は経済的な困難さは幾分小さかったが、しばしば子どもにとってはかなりの心理的苦痛をもたらした。歴史人口統計学者という者は、両親の死亡率よりも幼児死亡率を大変大きく強調して来た。7歳かそれ以前に父親を亡くしている八分の一もの多くの子どもにとって、社会的個人的結果は考慮すべきで、多くの注意を払うに値する。

エリーズ・エヴァンズの父親の死亡は、彼にとって経済的な面でも心理的な面でも困難さを持ち込んだ。成る程、彼の自叙伝によると、抱え込まれた精神的外傷が後年の情緒的不安定や、どちらかと言うと疑り深い物の見方にとって、原因の一つに充分成り得た様に思われる。彼は父親好みの子どもであったと思い続けた。確かに彼の父親は大きな声で読める才能に大きな誇りを表わし、来客にも彼を紹介したものであった。

私が英語を完全に読めるように成ると早くも私の読むのを聞く総ての人の賞賛を呼んだが、

⁵⁰ Nine of the thirty-one who describe both their parentage and their education. The extreme example is John Whiting of Somerset who was born in 1656, son of a 'reputable yeoman', who died when John was two 'while I was very young, so that I cannot remember him'. His mother remarried in 1661, but died in 1666 'when I was about ten years old, which was a great trouble to me, she being a tender mother'. The orphaned ten-year-old let his step-father remain in possession of his lands to bring up his three younger half-brothers, but he, in turn, died in 1672, so the young John chose a gurdian until 1675, when he 'went to his own house', and presumably assumed headship of his family. John Whiting, *Persecution Expos'd...* (1715).

⁵¹ In eighteenth-century France, about one eighth of children had lost their fathers by this age, and by fourteen, the age at which apprenticeship normally seems to have started, a quarter of children had lost their fathers. Calculated from Harvé Le Bras, 'Parents, grands-parents, bisaieux', *Population* (1973), 34. I am told by the Cambridge Group for the History of Population and Social Structure that these figures should apply to seventeenth-century England.

それは私が非常に幼くても学習にとても積極的であったからで、皆は神様が私を何か偉大な仕事をするように予定されたと結論づけた。しかし、(中略) 死は私が7歳に成る前に父親を取上げ、今や父親が死んだ事で父親も私を少し前迄彼の喜びであった事を思い出せない。最後の遺言を記す際に、父親は総ての子どもに名前で、そして多くの親族に相続分を残している。それなのに、私は遺言状で言及されずしなかったし、私には何も残されなかったの、間もなく、人を無益に信用する事の愚かさを知る事に成った。(中略) この後、書物によって語形論 (*Accidence*) を学び終わったが文法 (*Grammar*) や書き方に全く進んでいなかった時に、学校を去らねばならなかった。⁵²

エリーズは書き方を学んだ方法や時期を我々に告げる事は無かった。確かに、通常の年齢では彼には機会が無かった。書き方を学んでいただろう8歳で、通常よりもずっと幼かったが、ある仕立て屋に徒弟となった。短い教育の期間から7歳のある時期まで、決して満たす事の出来無かった書き言葉への情熱を忘れないでいた。彼が劇的に語る話の一つが、もしそれしか可能でなかったら、物凄い個人的な不便を払ってでも満たしたい、情報と書物へのこの渴望を明らかにする。22歳で、多くの人に倣って、働きながらロンドンへ出ようとし始めた。

それからコベントリーで働いて、1年の四分の一期間そこに滞在した。私の主人の家に有った、ノアの洪水から征服者ウイリアム迄のブリテンとアイルランドにおける総ての章句を示す一冊の古い『年代記』が理由で。それは分厚かったが、日中は読書に割ける時間を傾け、夜の為には蠟燭を買ったので、「その最も重要で不可欠な部分をそらで身につけてしまった。」⁵³

この知識を求める希望は、労働する日中にそれを吸収するための時間を探す事までの問題や、夜にそれを読むための灯かりの元と一緒に、どの時期でも総て大半の自学した働く人々にとって共通していたように思われる。17世紀に自叙伝作者が会った物質的な困難さは、彼らの19世紀の後継者と基本的には同一である。⁵⁴

エリーズ・エヴァンズやトマス・トライアンの様に、トマス・チャブ⁵⁵は、都会がロンドンでは無くソルズベリーであったけれども、都会に移動した田舎での生い立ちを持つ少年であった。またエリーズ・エヴァンズの様に、彼の父親の死が、それ程酷くは無かったが彼の前途に影響を及ぼした。彼は、1679年に生まれたイースト・ハーナムの麦芽製造人⁵⁶の息子であった。

⁵² Evans, *op. cit.*, 6.

⁵³ *Ibid.*, 13.

⁵⁴ Vincent, *op. cit.*, Ch.5. See below, p.433, for Thomas Boston.

⁵⁵ T. Chubb, *The Posthumus Works of Mr Thomas Chubb... To the whole is prefixed, some account of the author written by himself...* (1748).

⁵⁶ Maltsters are wholesale tradesmen, who are usually, not always, more prosperous than husbandmen, but less prosperous than the more substantial yeomen. The two maltsters whose inventories survive from the 1660s in the Lichfield area, for instance, left goods worth £48 and £132 respectively. The nine men whose contemporaries described them as husbandmen all left under £100, but the fifteen men described as yeomen left goods ranging in value widely from under £50 to just under £300. D.G. Vaisey (ed.), *Probate Inventories of Lichfield and District, 1568–1680*, Collections for a History of Staffs, 4th series Vol. V (Staffordshire Record Society) (1969). Thomas Boston (see below, p.433), the other son of a maltster discussed here, was born in the same decade as Thomas Chubb, but in the Scottish Lowlands.

彼の父親は、彼が9歳の時に寡婦と5人の子どもを残して死亡するが、この中で彼は末っ子であった。彼は聖書に関する長文の著作序文で自分自身について書いた。

著者は英文を読むこと、普通の書法で書くことを教えられ、更に算数の一般的な解法を教授された。この教育は彼の家族の様な境遇にある者や教授されなければならなかった時代にとっては適切なものであった。と言うのも著者の母親は自分自身と家族の生活費を得る為に激しく働いたので、母は生活費を得る為にも、子ども達に自分の分を果す様に強いなければならなかった。従って、著者は自分の年齢と才能に相応しい仕事や奉公をする様にとてつ小さな内に求められたので、上に記した物以上の教授の為に時間も手だても無かった。⁵⁷

彼は1694年、15歳でソールズベリーの或る手袋製造職人の下に徒弟に出された。彼の記述からは父親の死亡の為に9歳で学校を去ったという事は確かでないが、その時に、書く事と初歩的な算術を学ぶ為に2年は要したであろうから、多分そうであろう。彼は明らかに巡回記録に「読み書き計算を」⁵⁸教える為にしばしば免許を与えられていた教師の一人の下に通っていた。彼はグラマースクールのカリキュラムに乗り出す積りも無かったし、チャンスも無かった。徒弟修行後に旅職人になったが、弱い視力では手袋製造職人としては不利であった。そこで1705年以後は獣脂蠟燭職人の下に住込み働いた。彼は蠟燭店に勤務して手袋は一時的にしか作らなかつた。彼は結婚した事が無かつたが、まるで父親の死亡後における貧乏の経験が次に示す様に酷く影響していたかの様に響く。

著者は、彼の場合がそうであったが、彼等を養う見込みも無く家族をこの世に持ち込むのは大いに不適切であり、そんな冒険は大抵大変な貧乏を伴うと(判断した)。箴言によると神はそれを満たすのに食物を送らずに口は送らないと言うけれども、著者は、日々の経験によって或る人にとっての食事は大変な困難を伴わなければ入手出来ないという事を見た。その様な場合に箴言を信用する事に関して、著者は、彼等の困難からそれに従属している者達を脱出させる為に、箴言が干渉する事を見出さなかつた。⁵⁹

トマス・チャブは、自分の最初の小冊子が出版された経緯について説明をしている。この説

⁵⁷ Chubb, *op. cit.*, ii-iii.

⁵⁸ Although it seems that there was no hard and fast distinctive line drawn between a schoolmaster licensed to teach 'reading, writing and arithmetic' and one licensed to teach 'grammar'. At one visitation a man might well be licensed to teach grammar, who had previously been licensed to teach reading and writing, and vice versa. It does not seem as if there was a clear distinction, in the small 'private' schools which were both so numerous and so impermanent in the seventeenth century, between 'English', or 'petty' schools, and grammar schools. The masters probably taught according to the aptitudes of the different children, the desires of their parents, and the length of time the children could be spared for education from the labour force, as well as their own ability and training. The flexibility frequently found in seventeenth-century education is indicated by the licenses to Thomas Orpe, *litteratus* 'to teach boys in English as well as in Latin as long as they were able' at Norton, Salop, in 1695. Alan Smith, 'Private schools and schoolmasters in the Dioceses of Lichfield and Coventry in the seventeenth century', *History of Education*, vol. 5, no. 2, (1976) 125; Margaret Spufford, *Contrasting Communities* (1974), 187.

⁵⁹ Chubb, *op. cit.*, iv.

明が持つ魅力は、小冊子自身についての説明に在るのではなく、少年時代以降の書かれた文章に関する彼自身の習慣とソールズベリーでの彼の様な若者全体の文筆活動を明らかにするその仕方に在る。

聖職のフィストン修士が、彼が1711年頃に『復興した原始的キリスト教 (*Primitive-christianity revived*)』と名付けた諸論考に対する歴史的序説を出版した時に、その序説を書く仕事が、偶々ソールズベリーで読書人であった著者や彼の知人の何人かの手に落ちて、友人の何人かがフィストン修士と一緒に論争の主要箇所、即ち一人の神と、あの父が持つ総てからの単純な優越性、に加わったので、何人かはフィストン修士と反対の立場に立って、それが、彼等の間での論争という一論考をもたらした。著者の友人が問題について自分自身の考えを易しく十分に表現することを恥ずかしがり、互いに疑問を出し合う事で反論する道を選んだので、これでは問題を全く明らかにしようが無く、論点がまた問題になると著者には思われた。そんな事があり、彼がしたやり方で、その方が論争を決着させるもっと確実な方法に見えたので、主題についての彼の考えを書き上げる事に自然にさせられた。そしてこれを著者は、これが皆の検討に供されるという考えさえ持たず、彼自身の満足と、当時彼の知り合いは限られていた、ソールズベリーにおける彼の友人にとっての知識と満足の為だけにした。それは彼自身、注目を掻き立てられた問題について、幼い時から考えを文章にする習慣を持っていたからであり、それによって自己を喚起させ満足させ、次に多く事例で、この場合はどれであったかとその問題を枠組に当て嵌めて来たからである。⁶⁰ 著者は前述の主題についての自分の意見を整理して、知人に見解と閲読を求めたところ、その文章に何人かは受入れ、他の人は対立する考えだった。これが著者と、意見を異にする何人かの間で文書による論争を引き起こし…彼らの間で何遍もの書簡や論文のやり取りがあった。

終にはチャブが最終的に書き上げた手稿を友人の一人によってフィストン自身の許に意見を求める為にもたらされた。フィストンはその手稿を出版させたので、ソールズベリーの旅職人の作品が初めて印刷本の中に入れられた。

彼の精神には冷静で理性的で探究的なところがあった。彼はキリストの神性を否定し、聖書を批判的に見る有神論者であった。

この著作集は神にとっては最も名誉を汚し、人にとっては最も有害な教義の元であり続けた。絶対無条件な神の選びと定罪、宗教的迫害等々の教義として。その上、聖書と呼ばれるこの本は、至高の神性よりはるかに劣ったり、至高の神性にとって全く意味の無い多くの事柄を含む。神は「子どもを父無し子にし、妻を寡婦にさせよう、子どもを引き続き放浪者にし、子孫は絶え、次の世代に名前が忘れられるように請わせよう」という様な悪意のある願いを認め、許すべきである。この様に不真面目な見方や他人の不幸を喜ぶ欲望が、危険な事に本当に弄ばれている。これは神の所産と考えられるべきである。⁶¹

⁶⁰ The italics in this passage are mine; *ibid.*, v-vii.

⁶¹ Chubb, *op. cit.*, I, 6-7.

「一般における神の啓示、特殊におけるユダヤ教、マホメット教、キリスト教について神の最初の啓示」に関する論考を含む彼の選集は、「私が世に出した物の中で、人の感情に対してではなく、理解力に訴えて来た」⁶²という典型的な言説で終わっている。彼の偉業はトマス・トリオンと同じ程度に驚くべき事では無いが、結婚して家族を養って行くには貧しすぎるこの都市の職人、弱い視力で一時的にしか働けない旅職人の手袋製造工、店で蠟燭の目方を量りながら、それを、彼自身か友人の喜びの為に彼らの次の「紙上討論」用原稿に使おうと考える蠟燭製造販売人の一時的な助手についての生き生きとしたイメージは魅惑的である。18世紀初期のソールズベリーで「読書人」であった旅職人の中で行われた神学的な主題での真剣な議論についての生き生きとした教養を感じさせる雰囲気は、勿論都会的なものであるが、トマス・チャブはそれに加わり、1680年代の恐らく10歳にならない内に読み書き計算を総て彼に教えた田舎の小村での教育に基づいて、その議論を明らかに導いた。

チャブが18世紀の20年代に出版に向けて書き出し始めるほんの少し前に、スティーブン・ダック、慎ましい田舎出身の出で初めての18世紀田園詩人は、ソールズベリー平原の北端のチョールトン・聖ピーターに生まれた。⁶³彼の教育は、まさにトマス・チャブのそれと同様のもの、彼は英語の読み書きと、「普通にこの程度の学習に付いている算数」を学んだ。彼の最初の伝記作家であるジョセフ・スペンスは、彼は有りそうも無いほど遅いと聞える14歳になるまで、学校から連れ戻されなかったと書いている。彼の父親は、彼が学校を出た後で、小さな土地所有権を提供する位は出来たのだが、それに失敗した為に、彼は自分の生活費を日雇い労働者として稼ぐ事となった。彼の自らを進歩させる幸運は、ロンドンでの仕事の合間に2～3ダースの書物を獲得していた一人の人物と彼が友達になった時にやって来た。これらの書物の中に、7つのシェイクスピア劇、ドライデン、ヴィルゲリウス、セネカ、オウヴィディウス、雑誌『スペクテイター (The Spectator)』と、ダックがそれを理解できる前に辞書の助けを借りて2度読んだミルトンの『失樂園 (Paradise Lost)』があった。エリーズ・エヴァンズがしたのと丁度同じ様に、広範囲に自分の記憶に頼った。彼が最初にポープの『批判に関する評論 (Essay on Criticism)』を読んだ時、ほぼその全文を一夜にして憶えてしまった。『スペクテイター』誌上の詩句が彼に自分の詩を作るきっかけとなった。彼自身の日雇い労働の個人的経験、これらの文学モデルとその語彙の吸収が、彼の一番初期の詩である「脱穀者の労働 (The Thresher's Labour)」の背後にある。

我々はここでは1720年代の一時期を考察しているのであるが、スティーブン・ダックのミルトン、ドライデンやシェイクスピアを読む才能や、自分自身の詩歌を作る能力は17世紀の基礎的教育が授け得た識字程度についての非常に貴重な証拠である。勿論、ソールズベリーにおける彼より年長で同期の人、蠟燭製造職人の助手の様な日雇い労働者は、非常にまれな人間であった。それにもかかわらず、17世紀で8歳か9歳までに、基礎的な科目である、読み

⁶² *Ibid.*, II, 355.

⁶³ Michael Paffard, 'Stephen Duck, The Thresher Poet', *History* (1977), 467–72, on which I have drawn heavily here. See also Rayner Unwin, *The Rural Muse* (1954). These critics have assumed that Duck must have acquired his education at a charity school, although there was not one near Chorlton St Peter. There is, of course, no reason why he should have been at a charity school. The rudiments he had been taught were the normal basic ones for which most of the sixteenth and seventeenth-century schoolmasters were licensed. See above, p. 422, n. 58.

書きと単純な算数の教育を与えられた、貧しい田舎の環境出身の少年が、発展させる事の出来た文学的な技量を、彼は証明している。

ジョシア・ラングデールは、ここで考察されている自叙伝作家の中で、生育環境が十分に長い期間をかけグラマースクールでの教育に手が届く迄にもたらず程に裕福な人の最初であった。⁶⁴ 彼は 1673 年にイーストライディングのネファートン村で生まれ、彼が書く様に、「大きくなってから」学校へ行った。彼が 9 歳になる前に、父親が亡くなるが、それ迄は彼は働く様には求められなかった。その時に、母親は家計にとって彼の働きは不可欠だと分かった。トライアン同様、彼も自分の技、彼の場合は工業的なものではなく、はっきりと田園的な技であったが、それに大きな誇りと喜びを感じた。

当時、私は学校を退かされて、年齢の割には元気な少年だったので、馬鋤を引いて掘り起こす事を学ばされた。又、夏季には繫縄で結んだ馬と牛を自分の田舎に所有していたので家畜の番をし、時期が来ると細心の注意をして移動させた。と言うのも、良く懐いている家畜を見るのが好きだったからである。鋤に従ったり、草原で家畜の番をするそんな日には、宗教的な気分が耽った。我々の農作業の遣り方で自分に出来る事に懸りっきりだったので、更に学校教育を受ける時間は無かったが、ラテン語で少しは上達したけれども、直にそれも忘れてしまった。それでも英語の勉強は続け聖書を読むことは出来たので、そこに喜びを見出した。

今やほぼ 13 歳で、体力もついたので母親に立派に尽くせし、鋤の使い方も身に着け、この仕事に熟達したので、4 頭の馬で唯一人鋤く事が出来るほどで、種まきの季節以外では何時もの事であった。鋤を持つのが大変な喜びだったので、それは私の精神に適した仕事であり、誰も私の黙想を乱さなかつたから、益々それが好きになり、経験によって、精神を内面に向けて持つ事や神の歩んだ道と為された事を黙想する事は私にとって大きな利益であり、安らぎである事に気付いた。

しかし、ジョシアが傾倒した事が総て祈祷に関わるというものでも無く、彼は大いにダンスする事にも引かれたが、それはネファートン村の重要な青年の娯楽であった。この重要な余暇活動が田園地方で学ばれた方法について私が此れ迄に見た唯一の説明を彼は与えてくれる。この点で彼の記述は混乱してくる。と言うのは、譬え彼が 9 歳以前に正規の学校を去りラテン語を忘れたとしても、彼は学校が終って夜に、14 歳に成る前に習ったように思われる。これは彼が 9 歳以後に農業での日常的な仕事が許せば、散発的に学校に出席していた様に響く。文法を教える事の出来る田舎の教師が又、夜にダンスする事を教えたのでない限りこれ以前にラテン語を含む学校教育がネファートン村の外に在った事だって可能性としてはある。

ダンスする事は、わが町の若者の心を大いに引きつけた。多くの邪悪な事がこの学校で行われた。このダンスの師匠は一人のバイオリンを引く曲芸師で、我々の授業が済んだ後に、毎

⁶⁴ Josiah Langdale, 'Some Account of the Birth, Education and Religious Exercises and Visitations of God to that faithful Servant and Minister of Jesus Christ, Josiah Langdale' (died 1723) Friends' House Library, MS Box 10/10. All the passages quoted here are taken from pp. 1, 2, 3, 5, 7, 8.

晩彼は自分の芸当を演じに行った。以前には私の頭と心にとって過度の悩みとなったので、多くのダンスを習わなかった。暫くして、私の遊び仲間が祭日に私を唆そうという気になったが、そこには若い男女が会って笑い楽しんでいる。その様な所に、我々のダンスを上達させるという口実の下で、私は招待された。

ジョシアの運命は、彼の母親が7年の寡婦の後に再婚した時に再び変わった。母親はもはや彼の助けは要らなくなった。その時点で15歳の少年は農業の住込み奉公人となった。彼の宗教的探究は続き、奉公人として2年目に影響力の有った親しい友人によって育まれた。この友人についての彼の記述は、不十分な17世紀の識字力が正にどれほどの物に成り得るかを見せてくれる。

私が新しい主人の下に来てから、主人は脱穀者として若い強健な男を使ったが、盲人で、10歳の頃に視力を亡くしていたので、それから凡そ20年経っていた。彼は、私が時々唱えるのを聴いた詩篇を超えては教えられていなかったが、この男は主人の子ども達を教え、後には有名な学校教師になった。彼は大きな記憶力と良い理解力を持った人間であった。

もし読みを盲人によって教えられることが出来るなら、記憶と暗記の役割が本当にとっても大きなものであったに違いない。

この友人との会話やリクリエーションについての記述が1680年代の文学好きな一組の労働者の世界に何がしかの洞察を与えてくれる。そしてそれは彼らが耽ったセクト派の説教趣味の驚くほど冷静で評価に関わる繰返しや、聖礼典の必要性についての悩み事であったが、後者の事で一時期クウェーカー主義から退いた。彼等の意見は聖書朗読に基礎づいていた。

我々は夏時間に入る最初の朝には、説教に関して最も有名な司祭の話を書くために、数マイルも徒歩で互いに歩き通したもので、その道中に有益な話をした。我々の郷里ではもっとも有名で学識のある司祭に属する一人の話を聴いて帰宅中であつたが、彼は言い出した。ところで、ジョシア、私はこういう司祭の話を書くのにうんざりする。彼等はまったく努力をしない世代で、彼等にはイエス・キリストの司祭になれっこない。今日聴いた説教も同じ人から数年前に聴いたものだったので、司祭がその文章を選んだ時にどう扱うか考えてみたのだが、彼がそうするだろうと考える通りに司祭もそうした。彼が言うには、一体どの仲間に加われば良いのかさっぱり判らない。頭の中で、イングランド教会、長老派、バプティスト派、クウェイカー派について詳しく調べて見るのだが、クウェイカー派は会話では総ての人に優ると言うけれども、彼等は洗礼も聖餐も用いないと彼は続ける。それで、大抵は鋤く事である仕事に従事しながら、重大な思いが私の中に再び新たに湧き出した。その結果、我々二人は、聖書を携えて、最初の朝に畑の中にしばしば入り込むことになった。そこで互いに座って、しばらく聖書を読んだ後は、心の内に主に従う望みを持って待ちながら黙って座っていた。

盲目の脱穀者と文学好きの農夫は、彼等の教育が中断されたという同じ理由のために、住込み奉公人になった可能性はある。前者は盲人となった原因の事故か病気で、後者は両親を失う

という人口統計上の事故で。正にこれらの理由で農業労働に入る幾分文学好きの人々の一定した細い流れがあったに違いなく、ヨークシャーにおけるこの一組の文学青年は普通ではなかったかもしれないが、確かに彼等は特異な事では無かった。地方のシュロップシャーで1630年頃にあったリチャード・バックスターに起った最初の「良心の覚醒」は、教会で「詩篇と聖書の章句の朗読」を何時もしていたその町の「貧しい日雇い労働者」によって鼓舞されるが、その男はリチャードの父親に、若いリチャードに影響を与えた「バニーの決意 (Bunny's Resolution) という名の、一冊の古いぼろぼろになった本」を貸していた。⁶⁵ 文学好きな労働者のこの様な例は、自分の名前を記せたであろう1580年から1700年の労働者の15パーセントを表わすと捉える事が出来よう。⁶⁶ 我々は読み書きが教えられる順序に関する証言や上述の自叙伝作家の経験から自分の名前を記す事が出来る人は皆読む事が出来たであろうと確個として推論して良いだろう。農業労働者内のこの文学好きなグループの存在が、1500年から1700年の間のイングランド社会における変化の重要性を私に強調させる理由の一つである。それが、文字の読めない人は何処でも文字の読める人と身近だったし、口述の世界は印刷世界と身近だったという私の論点を証明する。スコフィールドは少し前に、「人口の内には、完全に文字文化との接触から切り離された田舎の特定部分における農業労働者の様なグループが恐らく存在していた」⁶⁷と考慮すべき事として提案した。クレッシィは最近同意した。彼は地方労働者のグループ内に一人でも読める者がいれば、文字世界への重要な橋渡しとして振舞う事が出来るという事実をしぶしぶ認めただけでも、彼は「通常は、この普通の人々は彼等より優れた人々に影響を与えた政治や宗教の論争には無関心であった」⁶⁸という感じ方をしている。ラングデイルの生き生きした議論は彼を支持する事はまずあるまい。時代を超えて署名可能な労働者のある程度の割合が存在し、それが結びつく事で、回覧される安価な印刷数と結びつき、ラングデイル、バックスター、トマス・トライアンの読む事の出来る羊飼仲間から取り纏めうる簡単な印象と更に結び付ける事で、これには同意できないという正当な理由になると私は思う。17世紀における成人男性にとっての将来の見込みや、早期に父親を亡くした子どもの割合から、社会の出世階段をだらだらと滑り落ちる一定の人がいたと思われる。⁶⁹ 途中で教育を終えた孤児になった少年が徒弟になったり、奉公に出たりする確かに細い道が、16、17世紀に大多数の文字の読めないグループが「文学好きな」メンバーを含む様になる道の一つであった。

これ迄引用して来た総ての自叙伝作者は非常に貧しい境遇の出身であるとか、父親が早く亡くなったためにグラマースクールへ行けなほど多くの苦勞をした人達であった。次のグループの人はヨーマンや商工業を背景に持ち、有用な人に成りたくて一生懸命に学問を吸収している時期の相応しい所で、彼等の教育は父親によって中断されている。彼等は決して大学進学を目指しはしなかった。社会的背景や教育経験を明らかにしている自叙伝作者の三分の一は14歳で徒弟に成った。⁷⁰ 大学入学者だけに基づいた17世紀教育の見方に対する非常に重要な修正点がある。その様な見方は必然的に学校を出た少年が様々な商工業に入っていた流れを完全

⁶⁵ Keeble, *Autobiography of Richard Baxter*, 7.

⁶⁶ Cressy, 'Educational opportunity in Tudor and Stuart England', 314.

⁶⁷ Schofield, 'The measurement of literacy in pre-Industrial England', 313.

⁶⁸ David Cressy, 'Illiteracy in England, 1530-1730', *Historical Journal*, xx, 1 (March 1977), 8-9.

⁶⁹ See above, p. 420, n. 50.

⁷⁰ Eleven of the thirty-one, including six of the nine orphans.

に無視することになる。自叙伝作者の証言が示唆するこの流れは大いに考慮されるべきである。含み込まれる少年は巨大な社会的経済的範囲からやってきた。

エグゼターのジョージ・トゥロスは2度市長になった貿易商の娘と結婚した著名な法律家の息子であった。ジョージはグラマースクールで異彩を放っていて、彼が15歳の時「貿易商になる決心をして」学校を辞めた時には、彼の先生は反対だった。ケンブリッジの参事会員ニュートンは、息子の知的達成に確かに大きな誇りを持っていたし、そうでなければ彼は息子に7歳で書くという新しい技を、彼自身の日記に、息子に書かせて祝う事を許さなかつただろう。ところが、このグラマースクールの作品を自慢したけれども、14歳で或る乾物商人の所に徒弟に出してしまった。⁷¹しかし、関わる少年は単に町人の息子ばかりではない。町が及ぼした磁性の程度について、自叙伝は豊富な証言を含む。勿論、ロンドンが拔群だった。自叙伝は当時の徒弟制度が持った形成的効果、ピューリタンの集会、その時出席した機会について多数の証言を提供する。彼等の背景は、彼等がそこに着くまで旅して来た距離と同じく多様であった。エリズ・エヴァンズはウェールズから州を超えて歩いて来たし、トマス・トライアンはグロスターシャーから来た。ウィリアム・クラウチはハンプシャーの実力有るヨーマンの息子で、父親の早い死と結びついていた内戦が彼から、父親の遺言状によって期待していた土地の相続権とヨーマンの息子としての権利として正当なものを見なしていたグラマースクールの教育迄も奪ってしまった。彼は様々渡り歩いたあげく、最後にはロンドンの徒弟となった。⁷²彼が幼かった時に亡くなった、裕福なノーフォークのヨーマンの息子、ベンジャミン・バンクスは似た経歴を持つが、もっと儉しく地方の靴職人の下に徒弟に出され、計画というより突発的な事で最後にロンドンにやって来た。⁷³

地方都市も少年達を背後に有る田園地方から引き寄せた。トマス・チャブはソルズベリーへ行った少年の中の一人に過ぎない。熱狂的なウィリアム・デュズベリーは13歳でリーズの時計職人の下に徒弟となったが、特にクェーカー教を実際に知りたいと思い、そこでならそうする事が出来ると知っていたからだった。⁷⁴ウィリアム・エドモンドソンという孤児の場合は、ウェストモアランドで6人の子どもを持つ家族の末っ子で、4歳の時に母親が亡くなり、8歳で父親を亡くし、更に父親の遺言の下での相続分も得られなかった。彼は大工でヨークにやって来た人の徒弟になった。ジョージ・ビュウリーは1684年にカンバーランドで生まれた第2世代のクェーカーであった。彼は12歳になる迄は、家から1マイル程の学校に出席していたが、その年に、叔父と一緒に20マイル離れた学校に寄宿するように送られた。これはグラマースクールでの教育らしく響く。14歳で彼はダブリンのリンネル反物商の下に徒弟として送られた。彼の両親は手紙によって連絡を欠かさないし、更に興味深い事に、彼の一番上の姉が、しばしば長文の手紙をも彼に書いていた事である。⁷⁵地方都市の親方の下に徒弟となった田園地方出のこれらの少年達とは別に、多くの他の者は、彼ら自身の地域の職人に単純に徒弟となった。勿論有名な例は、ジョージ・フォクスで、レスターシャーの織工の息子が靴屋の徒弟となっ

⁷¹ See above, p. 412.

⁷² William Crouch, *Posthuma Christiana...* (1712). See below, p.432, n. 83.

⁷³ Benjamin Bangs, *Memoirs of the Life and Convincement of that Worthy Friend...* (1757).

⁷⁴ William Dewsbury, 'The first birth', in *The Discovery of the Great Enmity of the Serpent against the Seed of the Woman...* (1655).

⁷⁵ George Bewley, *A Narrative of the Christian Experience...* (1750).

た。⁷⁶ 自叙伝から判断すると、17世紀教育の持つ主要な効用は少年達を徒弟に準備する事であった。自叙伝作者の何人かにとって凡そ14歳で大学教育を始める事は、教会の為に少年を準備する高度に専門化した数少ない徒弟制の形態であった。

ほんの今述べた者達より僅かばかり裕福な背景出身か、父親の死亡によって社会的階梯を突き落とされなかった少年や、大規模な商工業者やヨーマンの息子は、父親によって学校から呼び戻される前に、有用な適当な水準迄の文法教育が与えられた。彼等の中の何人かは実にヨーマンの息子で、自分の地域で地方の役人として活動する更に富裕な農業企業家としての諸活動と生活の為に準備されたのであって、大学での訓練課程については考えなかった。しばしば文法教育はそういう人々によって受取られて来たのであって、大学教育ではなかった。自叙伝作者の次のグループは、ヨーマンの社会的世界と彼等の期待に幾分かの洞察を与えるであろう。

17世紀の丁度終る時に生まれたジェイムズ・フレットウェルはヨーマンで各種の商売、即ち材木商、馬の飼育・販売、大工、真鍮細工師を営む家族の出であった。1670年代に生まれたジェイムズの父親はグラマースクールへ行ったが、彼の父親は彼を「私の祖父が必要と考えるだけ十分に彼が学んだ」後、「父親を祖父自身の仕事に就かせる」ために、学校を辞めさせた。父親は資産の有る材木商だった。家族の行動様式は繰り返された。ジェイムズは5歳になる前にグラマースクールへ入った。⁷⁷ 何故なら、この学校は5マイル離れており、小さな子どもが歩くには遠すぎて、初め通い始めたが、学校近くに住む一人の寡婦の下に週日下宿させられる事になった。自叙伝作者は、学校が疎らであった為に起こされる利用し易さの問題を克服する為に、通常この様に下宿させられた。5歳から14歳の間に、ジェイムズと彼の弟は3つの別の学校へ行き、3つの違う家族に下宿した。彼の記述から、子ども達を下宿させる親戚や以前の使用人の入手可能性が学校の変更を規定した事は大いに有り得る。13歳で2番目の学校を出る時まで、彼は「ギリシャ語に入っていた」。彼が14歳の時、彼の父親は、「私が商人に役立つ教養言語⁷⁸を十分に学び取ったと考えて、仕事の為に私に資格を与える様なもっと直接的に関係の有る物事を学ぶ時期だと考えた。そこで、私をポイントフラクト氏の下に遣わ

⁷⁶ George Fox, *A journal, or the Historical Account of the Life, Travels, Sufferings* (1694).

⁷⁷ See above, p. 411.

⁷⁸ James never learnt a modern language. The normal way to learn a modern language seems to have been by exchange, usually at about fourteen, before commencing a trade. Prosperous merchants exchanged their sons: George Trosse, son of a lawyer, was sent off at fifteen in 1646 to a French minister who took in a group of English youths for two years (*Life of the Rev. Mr George Trosse, late Minister of the Gospel at Exon* [1715]). This followed his grammar schooling and preceded his apprenticeship to a Portuguese merchant. The extraordinary Henry Lamp who eventually settled down at Ulverston in the Lake District as a respected Quaker, after running an apothecary's shop in Lynn and spending some years searching abortively for the philosopher's stone, was the son of a Prussian merchant. He trained as a physician at Leyden. He first came to England to visit his brother who was living with a merchant at King's Lynn, whose son had been taken in as a member of the family at Conisburg to learn German. Henry Lamp, *Curriculum Vitae or the Birth, Travels and Education of Henry Lamp*, M.D., written by himself (1710, ed. J.J. Green, 1895). Thomas Gwin of Falmouth went to grammar school until fourteen, and then was removed to enter the family business of fishing and fish-merchandising. The first step was to send to France. Thomas Gwin, *The Journal of Thomas Gwin of Falmouth* (1837). Exchanges to learn foreign languages were not only arranged between prosperous merchant families, however. Edward Coxere, who became a merchant seaman, lost his father shortly after his birth. His mother then remarried a cordwainer. She sent him to a French family at fourteen, in 1647, taking a French boy into her house in exchange. He had no preparation for this visit at all, and 'was like one dumb' for two months, although he was fluent after eleven months. E.H.W. Meyerstein (ed.), *Adventures by Sea of Edward Coxere* (1945).

し書き方と計算を学ばせた。」彼はクェーカーでリンネル反物商に教えを受けたが、一部は「能書家であった」徒弟によって運営される学校を経営していた。ラテン語は流暢でギリシャ語を2年間学んでいたジェイムズも、書く事に関しては驚くべき程にあやふやであった様である。再び、この二つの技術間の分離が次の様に強調される。「それまで書く事は少しも学んでいなかったし、計算については何も思い浮かばない。これが、その種について持っているどんな学習を得たかである。私は一般に行われている算数や小数の規則の大半とやや少ない幾何学を通して進んだ。」それから彼の前に彼の父親がした様に、ジェイムズは学校を去った。彼にとって大学についてのどんな思いも無かった。⁷⁹

オリヴァー・サンソムはバークシャーのビードンで60年以上前に生まれていたが、彼もヨーマンの娘と結婚していた材木商の息子であった。彼の教育上の経験はジェイムズ・フレットウェルのものに非常に良く似ている。彼の教育は遅く始まった。7歳で「ラテン語と書き方」を学ぶ為に、一人の叔母の下に下宿をする様に送られた。彼は10歳で学校を変わるが「父親は私に帳簿をつけさせる為に私を家に連れ帰る事に成り、角材や材木を商う仕事の中で私に出来る事を教えてくれたので、そこには長く留まらなかった。」オリヴァー・サンソムの自叙伝は、サマセットのクェイカー、ジョン・ウィットティングのそれと共に17世紀の教養のあるヨーマンの世界への多くの洞察を与えてくれる。そこでは読む能力は疑問の余地なく前提される世界であった。付随的な事柄が全く自覚されていないという事が、読み書き能力が友人だけでなく妻達や娘達の中で毎日の暮しの中で用いられているその方法が、読み書き能力が取り入れられている仕方を明らかにする筋道を明かす徴である。オリヴァー・サンソムは「まだ世慣れない頃でさえ、聖書や私が出会った他の敬虔な書物を読む事に大きな喜びを受けた。」彼は結婚したが、彼の妻は「善良なヨーマンの家系で、教育についても真面目で適切な方法で育てられており、「私は以前の様に精神的な危機の中を歩み、優良な書物を、特にその目的の為に聖書の諸章を読む事に多くの時間を費やしたが、聖書に関しては私自身と同様に私の妻も親戚も大いに影響を受けていた。」オリヴァーの自叙伝は長期の数回にわたる投獄期間に彼の妻に書かれた手紙の総てを収めている。更に重要な事は、彼が天然痘に罹った時に「君が私からの次の知らせを受取る迄は、私に面会するという冒険をしないで欲しい。それでも出来るだけ度々便りを聞かせて欲しい」と、彼は自分の妻に厳命した事である。彼の妻の姉妹も獄中の彼に手紙を出した。1670年に彼は「君の姉妹に宜しく伝えて欲しい。そして私は彼女の手紙を受取り、彼女の中にあり、彼女を通して表明された神の愛が持つ意味を知って楽しく元気付けられたと知らせて欲しい。」と書いた。

オリヴァー・サンソムの父親は彼の為に結婚後にニューベリー近くのボックスフォードに贍本保有の土地を購入して、ヨーマン農業企業家の生活をする様に分与した。彼には助けてくれる一人の使用人がいたので、彼のエーカー数は広すぎる筈も無かった。彼は近隣では重要な人物だったので、クウェーカーの信仰にもかかわらず隣人からは良く慕われた。2年続いた獄中生活から解放された折などは、「私の多くの隣人達が家まで私に歓迎の挨拶をする為に駆け付けてくれた。」実際の所、1665年には、司祭が十分の一税を収める人物を夕刻に探していたが、村の巡査がサンソムの家でのクウェーカーの集会を解散させた時に、純粋な笑劇を偲ばせる状

⁷⁹ James Fretwell, 'Yorkshire diaries', *Selden Soc.* (1877), 172, 174, 183-7.

況が起った。司祭は探せ出せなかった訳で、彼等はその集会に出ているのだ。この同じ司祭が、何よりも識字に関するサンソムの考えを良く表わす或る出来事の責任者であった。1668年に、司祭が彼を三位一体の教義と秘蹟を否定すると告訴したが、ボックスフォードとウェストブルックの領主裁判所で、サンソムに反対して皆の前で長い弾劾演説に乗り出し、次の様に述べた。

（彼は）私に向かって多くの辛辣で罵りの言葉を用いて騒々しい長い演説をした。更に、それだけでは満足せず、狂暴になって自分の手で、私の帽子を多くの人の見ている前で私の頭から何度と無く奪り取った。この様に、彼は夕食に行く迄、私を全会衆にとって凝視される晒し者にするために、多くの時間を費やした。

オリヴァー・サンソムは非常にうろたえたが、明らかに一部はその裁判所が「3から4教区の主立った人物」を含んでいたからであった。彼はその様なグループの前で見世物とされた事に反対した。彼の信用を取り戻し、彼自身を守る為にすかさず取った矯正策は反駁の論文を書く事だった。「裁判が開かれている大会議場の中央場面に、この小さな論文を、出席している全員に見て読んでもらえる様に張りつけた。」彼は「それが数回張りつけられ、充分検討された」後で取り去った。彼の暗黙の前提は「3から4教区の主立った人物」は読む事は出来るし、そうするだろう。そうすれば、彼の自分を守る論文は彼自身に懸けられた告発に答え、彼等の目に彼自身の名声を立て直す手段として、明らかに彼にはする機会が欠けていた演説と同じであった。⁸⁰

サマセット、ネイルジーのジョン・ウィティング⁸¹は1656年に生まれたが、「私の先祖が数世代に渡って生活した同一の教区に十分な財産を持つ」確信を持ったクエーカー教徒の息子であった。彼の父親、母親、更に継父は彼の幼い内に亡くなるが、この地所はジョンに学校を続けさせるためには、明らかに十分なものだった。⁸² 彼は何歳で学校を出たかは我々に語っていない。彼は12歳の時には確かに在籍しているし、14歳になるまでそこに居た可能性だってある。彼は地方の聖職者の息子達と一緒にグラマースクールへ行ったが、彼の著述からは大学へ進んだという事をほのめかす様なものは無い。19歳で後見人の下を離れ、意欲的に農作業に従事するが、しばしば自分の信仰の故に投獄されて中断させられた。

ウィティングの自叙伝はそれ自身、もう一人のヨーマンであるオリヴァー・サンソムの考えを分け持つ非常に注目せずにはいられない一編であり、ごく少数の自叙伝を除く総ての物に似ず、彼等固有の関心の点でも今でも読み得る部分を持つ一編である。ウィティングは冷静で、

⁸⁰ Oliver Sansom, *An Account of the Many Remarkable Passages in the Life of Oliver Sansom* (1710), 1-10, 18, 41, 47, 75, 132. A similar situation of course already existed a century earlier amongst at least a group of the yeomanry. C.J. Harrison, 'The Social and Economic History of Cannock and Rugeley, 1546-1597' (unpublished Ph.D. thesis, University of Keele, 1974), 118-23, demonstrates the social importance of the court Leet meeting and also the legal capacities and attitudes, and network of correspondents, of a sixteenth-century yeoman farmer. He himself, although technically untrained, acted as both under-steward and steward of the manor, advising his lord on legal affairs in Staf-fordshire. A small group of such men regularly acted as legal advisors and representatives of the other pesantry in the manor court.

⁸¹ John Whiting, *Persecution Exposed* (1715)

⁸² Although in 1676 the acreage of winter and spring corn together only amounted to ten acres, which is of course extremely meagre by yeoman standards at this date, *ibid.*, 21.

洞察力のある明敏な観察者だった。自己の良心が彼をクエーカーの信念を行動に移すように駆立てた時、子どもとしての自分自身の印象を彼は記した。「平易な言葉も私には非常に貴重で、話の穂を接ぐのが非常に難しく、親類の人の何人かに会って話をした時間で、何マイルも先に進む事が出来た程である。」モンマウスの叛乱に対するジェフリーの懲罰を注視した囚人の衝撃的な反応に言及し、「彼等は可哀そうな人に無理に人間の四肢を馬の肉や動物の腐肉の様に引き摺り回らせ、煮させ、彼等の残忍性の記念碑として吊るさせた。」と記録した。彼が話題として取上げる他のフレンド教会員についても簡略した伝記を挿入したが、その伝記はしばしば良く出来ている。1679年にエリザベス・バスハーストの文筆から、彼が「この論説は事柄の深さと表現の点で異常過ぎて、誰も彼女によって書かれたとは信じないで病弱な女使用人だろうとするが、実際は彼女自身の著述として知られているのである」という声明文を書いた時のように、彼の噂話も興味深い。彼の良く考えられた、病的に興奮しない、思考の特色は非常に明らかに成功していて、⁸³ 彼の教区で地方の官職を持ち続けても驚くには当たらない。彼はクエーカーの思想を持っていたけれども、1679年に教区の貧民監督官だった。彼が12歳の時授業の後夜に他の少年達と遊ぶのを不承不承に諦めたが、このクエーカーの思想が同輩のグループから彼を切り離した最初だった。

彼の自叙伝の特色はジョン・ウィティングの教育に対する最良の証明書ではあるが、そこには彼にとって読書が持った重要性を明らかにする沢山の形跡が他にもある。勿論、彼は少年として「真実についての聖書の言葉」を読んだが、「炉辺で読む本と同じ様に、私は熱心に良く読んだ」と言う。彼は同様に、クエーカーによる書籍販売でもたらされた注目すべき組織に関する証言を提出した。彼が囚人生活をしたある時を語る際に、偶然ではあるが「私はフレンド教会の書物類を一包み持っていたが、それはロンドンから来たもので、私が何時もしてもらっている様に、配達人は彼が私の為に何時もするように、ニューベリンにそれを置いていった」と言った。彼の読書は、聖書やセクトの立場での宣伝文書よりやはり広範囲に亘った事が判り、彼はエウセビオスやバーネット主教に言及している。

触れられた限りの総ての自叙伝作者は大学教育の利益は受けることが無かった。彼等の社会的背景や教育経験が同一の人々の中で三分の一が大学に進んだ。総てでは無いまでも彼等の大半はもっと裕福なヨーマンや小ジェントリー、貿易商や聖職者を背景とする出身であった。私は彼等をここでは扱わないが、その理由は彼等の諸経験は、極く貧しい自叙伝作者によって発揮された基礎となる識字技術を獲得する闘争よりも良く知られている⁸⁴からである。こういっ

⁸³ The only other Quaker autobiography which I have read which compares with it comes from the previous generation of Quakers, and from the pen of a boy who shared the same yeoman background, but lost both estate and education because of the Civil War. William Crouch was born in 1628, son of a substantial yeoman in a small Hampshire village. Like so many others, he lost his father. 'My father was taken from us in the Prime of his Years, leaving his Children Young. And by reason of the Wars which happened in England, with the Unsettledness of our Family by frequent Removings, I was deprived of a great part of what fell to my Share, by the Will of my Father, and by Sundry Interruptions was prevented of that Education in Grammar Learning, which otherwise I might have enjoyed.' His lack of grammar schooling did not prevent his pen travelling; he became an apprentice in London, and his careful, first-hand observations of Quaker meetings and events in London from 1656, published as *Posthuma Christiana...or, A Collection of some Papers in 1712*, have the same kind of sober and intelligent approach as John Whiting's.

⁸⁴ Cressy, 'Educational opportunity in Tudor and Stuart England', *passim*. To him, of course, yeomen's sons at university appear a minority, sober and straitened group. This, as an overall view, is undoubtedly correct.

た少年達は、卑しい生まれの自叙伝作者の「虫目」で見れば、教育を受けたエリートと写る。しかし、彼等の境遇を「裕福な」とか「特権的」と要約する事は、勿論相対的な事である。17世紀社会のチャブやトライアの家族には、彼等は確かに特権的であるが、1623年のケンブリッジで自分の「食事代」として1日3ペンス受け取り、この中から買う事の出来ない書物を借りるのに幾らか使ったヘンリー・ジェシイの窮状は、この「特権」が如何に相対的であるかを正に明らかにする。⁸⁵ 低い生育環境出の少年が教育を得ようとして勉強する為のプライベートと静かさを見出す際に受けた物質的な難題についての簡潔な記述はトマス・ボストンによって与えられる。麦芽製造販売人であった彼の父親は彼にグラマースクールを卒業させる事は出来たが、その後、トマスは公証人の仕事を見付けるとか、ともかく大学の授業料を工面する為に2年を費やした。その時期に、ラテン語の力を落とさない様に奮闘し、ユスティニウスを再読するが、「麦芽貯蔵小屋の二階が私の勉強部屋であった (the malt-loft being my closet)」。⁸⁶

自叙伝作者達から受ける一般的な印象は、非ヨーマンの生育環境出の少年達は全く頻繁に1年か2年の偶発的な教育を受けるが、家庭の必要からか人口統計学上の不幸な出来事の為に、それも7歳以前にしばしば打ち切られた事である。14歳まで学校に居られるだけに十分な支援を受けた幸運な少年達は二つのグループに分かれた。ある者は徒弟契約に入り、ある者は聖職に進む徒弟時代としてか、教師になる為に大学へ行った。後者は殆ど総てヨーマンか、もっと裕福な家族の出身だった。

オックスフォードやケンブリッジは、ヨークシャーの労働者ラングデールと彼の友人ヒューソン、ウィルトシャーの労働者スティーヴン・ダック、グロウスターシャーでトライアンの読み方を教えた牧童達、ベッドフォードシャーの小職人で読書の好みを変えたジョン・バンヤン、田舎での教育を受けた都市の職人達であるトライアン、チャップやクロウチ、堅い信念を持ち、自信に満ちたバークシャーやウィルトシャーのヨーマンであるサンソムやウィットティングの「文学的」世界とは何の関係も無かった。更に重要な事は、彼等の中でラングデイル、サンソムとウィットティングだけがグラマースクールに何がしかを負っている。彼等が連帯して伝える光景は比較的貧しい家族出の少年でさえ6歳か7歳になる迄に1年か2年の教育を受ける可能性のある社会の姿である。仮に7歳迄学校に居れば読めるだろうし、仮に8歳か遅くとも9歳迄学校に居れば書けるだろう。何れの場合でも、行商人が彼の手の届く範囲に運んでくるどんな安い印刷本でも意味を理解する事ができたであろう。どちらにしても、彼の知的環境は巨大で大変重要な変化を経験したであろう。

テューダー・ステュアート期イングランドにおける文法教育と大学教育の社会的限定性を強調する最近の研究と、自叙伝作者が我々に与える初歩的な技術、その中には非常に粗末な程度の者もいるが、とりわけ読む力、の普及についての一瞥の間には今の所もちろん論戦は無い。しかしどんなに良く正当化されようと、第一の社会的限定性の強調は、第二の識字の普及によって加減しないと完全な像を与えない。読み方は彼等が少しも稼げない年齢で教えられ、書き方は一般的にはそういう少年が重要な稼ぎ手となった後の年齢で教えられたので、ヨーマンの等級以下の少年は読み方を学んだ事は多いに有り得るとする可能性を展望する点で特に不十分で

⁸⁵ Henry Jessey, *The Life and Death of Mr Henry Jessey...* (1671).

⁸⁶ Thomas Boston, *A General Account of my Life by Thomas Boston, A.M., Minister at Simprin, 1699–1707 and at Ettrick, 1702–32* (ed. G.D. Low) (Edinburgh, 1908), 13. For the prosperity of maltsters, see above, p. 422, n. 56.

ある。測定可能な技術、即ち署名能力のみに基づく「識字能力」についての記述は、必然的に、読む能力は書く能力より非常に広く社会的に普及された技術であるというここで示した可能性を除外してしまう。読む事に関する諸技術の普及によって導入された心理的社会的諸変化は非常に大きかったので、16、17世紀における安価な印刷本と初歩的な教育が結合されながら伸びて行ったその効果について均衡の取れた像を得るべきであるなら、取るに足らない自叙伝作者が挙げる、彼等の読み方に関する技術獲得についての証言を考慮に入れるべきである。

「文学的」女性の影響に関する付加的覚え書き

定義によれば「識字能力」には書く能力が含まれる。しかしながら、自分では書けなかったり、主教による免許認定手続きを上手く避けた多くの婦人教師が読み方を教えていた事は充分あり得たであろう。ロイド主教は1693年から8年迄、自分自身の任地であるスタッフォードシャー、エクレシャルの小さな市場町と教区について、非常に詳細な速記による調査資料を集めた。そこには彼が「学校教師 (schoolteachers)」と記述する少なくとも一人の男性と5人の婦人の名前が、一人の1年に2かい週間ずつ訪れる巡回する「書き方師匠 (writing master)」同様に含まれた。(1697年のエクレシャル町と1693-8年ノエクレシャル教区の調査についてのN. W. Tildesleyによる転写 transcript【手稿を活字に起す作業】と編集が1969年になされた。William Salt Library, Stafford 所蔵)。エクレシャルは特別主教区である事を考慮にいれても、ここに挙げられた人物の誰一人として主教区の記録に現れない。(私はこの知識をアラン・スミス博士に多くを負っている。)5人の婦人の4人までが日雇い労働者や小職人の妻であった。これは、これまで完全に観察を免れて来た一つの社会的な婦人のグループである。ジョンソン博士からオリヴァー・サンソムやジェイムズ・フレットウェル迄の著者が頻繁に最初の段階を教えた学校の女主人に帰しているものを明らかにする準備段階の教育で、彼等婦人達がとても重要な役割を演じていた様である。この事は、「婦人自身はめったに教育を受けなかったので、読み書きの出来る大衆の拡大に大きな役割を演ずる事は有りそうに無い」(thesis cit., 179-81)と言うクレッシーの提言とは反対の方向に進む。それはそれとして、自叙伝は読み方を教える母親について多くの例を含む。そこにはベンジャミン・バングの母親の様な人達を含むが、彼女は1650年代中葉に9人の子どもと妻を後に残したノーフォークのヨーマンと結婚したハートフォードシャーの聖職者の娘だった。彼女は年長の子ども達が奉公に出るに十分な年になるが早いのか、農場を売らざるを得なかったが、それでも幼い3人は家に留め、「彼女の世話と教育の下にあったが、…我々は皆本当に無頓着に、読み方にも書き方にも充分に力をつけてもらった。我々幼かった者は最後になったけれども、我々はペンの力で、我々の思う所をお互いに表明する事は出来た。」ベンジャミン・バング『生涯と信念についての覚え書き (Memoirs of the Life and Convincement)』(1757)。人口統計学上の不慮の事件を通して、社会的に下の方に読み書き技術を広げた婦人の例よりも更に社会的に興味のあるのは、自分自身は書けないが、読み方の技術を慎重に世話した婦人達である。オリヴァー・ヘイウッドの母親は、ランカシャーのファスティアン織工の妻であったが、読む事が出来ただけの様である。1614年の回心の後、少女がする様に「聖書を携え、一日中読んだり祈ったりして過ごした」。後に、息子は母親と一緒にピューリタンの礼拝や説教に行った。その後彼が書いた物によると、「幾らかは私が取った説教のメモが、彼女の記憶の役に立った」。彼はケンブリッジに進学した時

も、彼女に定期的に説教の覚え書きを送ったが、彼女は老婦人がする様について瞑想した。「彼女がそれを置いて記憶の中に徐々に呼起こし、注意をそこに集中するのが、夜のお決まりの過程だった」。彼女は子ども達の教育には非常に苦勞をした。「彼女は引切り無しに聖書や為になる本を我々に課し、祈り方を教えようとした」が、この教育の仕事が彼女自身の家族の外に広がった。「多くの貧しい子ども達を助けて本を買い与えて学習に向かわせ、学校に送出し、その先生に支払いをするのが彼女の日常の仕事だった。この事で、多くの貧しい両親は彼等の子ども達を読めるようになった事を (*by their childrens reading*) 神に感謝した。」(著者による強調)。『オリヴァー・ヘイウッド師、B. A.、1630-1702年、彼の自叙伝、日記、逸話、行事記録簿 (*The Rev. Oliver Heywood, B. A., 1630-1702: His Autobiographies, Diaries, Anecdote and Event Books*)』(J. ホースファル-ターナー [Horsfall - Turner] 編) 1882年、1巻42、48、51ページ等

(完)

[訳者後書き]

マーガレット・スパッフォードは、現在レハンプトン・インスティテュートのリサーチ・プロフェサーであるが、女史は、*Contrasting Communities* (1974)、*Small Books and Pleasant Histories* (1981)、*The Great Reclathing of Rural England* (1984)、*Celebration* (1989) 等の著者で、民衆を対象として、地域、文化、宗教を総合的に捉える研究で、早くから勇名を馳せている研究者で、私の「17世紀イングランドの遺言書——生と死の—文化類型の形成——」(三重大学教育学部研究紀要、48(教育科学)、1997年)は、1974年の著書の一部から学びながら、執筆したものである。女史は『教会史雑誌 (*Journal of Ecclesiastical History*)』の26巻3号(1985年7月)で、'Godly' とか 'Conformable' を17世紀で数量化できるのか、という題で、最近の研究傾向に痛烈な批判をあげている。

[追記]

訳稿を終えた後で、パトリシア・クローフォードの論文「出版された女性の著作、1600-1700年」がメアリ・プライア編著の『イングランド社会の女性——1500-1800年』に含まれており、三好洋子編訳『結婚、受胎、労働——イギリス女性史 1500-1800』(刀水書房 1985年)で訳出されている事を知った。(2002. 12. 17)